

city&life

都市のしくみと暮らし

no.121

Dec.-Mar. 2017-2018

特集

夕方からのまちづくり

巻頭言

夜も楽しく豊かに暮らす

「夜は寝るもの」という伝統的思考は日本人の価値観を形成し、ライフスタイルとして定着しているが、一方、現代人の実生活は、確実に昼から夜に向かっていることは、たとえば総務省が実施している社会調査からも明らかである。

ナイトタイムエコノミー。一般的には「9時～5時」などと呼称される昼間に行われる経済活動に対し、陽が落ちて以降、すなわち「アフターファイブ」から翌朝までの間に行われる経済活動の総称で、俗に「夜の経済」と呼ばれる。日本においては、ナイトタイムエコノミーの活性化は、政府レベル、地方自治体レベル、事業者レベルとさまざまなフェイズでその萌芽を見せているが、未だ発展途上であることも事実だ。

ナイトタイムエコノミーの振興を具体的にいえば、現在「遊休」となっている都市資産を活用し、新たな消費機会を創出し、域内事業者の収益性向上を実現する施策である。域内不動産の価値を高めつつ、同時にそこから期待される固定資産税や都市計画税としての地域財源の向上を目指すこと。ナイトタイムエコノミーは、地域経済にとって良い循環が期待できる、きわめて実利的な都市政策ではないだろうか。

都市に新たな賑わいと生活の豊かさをもたらすナイトタイムエコノミーについて、まちづくり、ライブエンターテインメント、働き方改革という、概念も方法もまったく異なる三つの視点から考える。

(編集部)



表紙——大阪市北区曾根崎「お初天神裏参道」
裏表紙——港区南青山「COMMUNE 2nd」
photo:坂本政十賜

特集 夕方からのまちづくり

contents	対談—❶—まちづくりとナイトタイムエコノミー	2
	夜が豊かに稼働する 経済性とQOLを高めるまちづくり 小泉秀樹×飯田泰之	
	対談—❷—ライブエンターテインメントとナイトタイムエコノミー	10
	お楽しみはこれからだ アフターファイブのまちづくり 木曾崇×木下斉	
	対談—❸—夜の時間と働き方改革	22
	夕方からの「自分の時間」時間主権を取り戻せ 大内伸哉×筒井淳也	
	photo essay 夜のざわめき 坂本政十賜	17
	連載 スキマファイル⑩ 両国・蔵前スキマ今昔	30
	連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く⑩ すばる保育園「大空のもと、園庭でのびのび元気に遊ぼう!」 亀久保ひまわり保育園「園庭は限りない可能性を秘めた〈フィールド〉」	34
	back number・information	38

夜が豊かに稼働する

経済性とQOLを高めるまちづくり

中規模都市圏の活性化は地域再生にとって最大のハードルであるといわれる。そのハードルを超えるための方法として、注目されているのが「夜間」の活用だ。じつは、中心市街地においても夜間に利用されていない、すなわち人のいないエリアは少なくない。人と人の交流にとって、また都市の活気にとって、さらにはインバウンド需要にとっても「ナイトタイムエコノミー」の振興は大きな意味をもつ。人と人が出会い、新たなアイデアを生み出し、ひいてはそれが地域の所得を生む。「ナイトタイムエコノミー」を活性化させ、活気ある町をつくり出すには……。

photo:坂本政十賜

小泉秀樹

東京大学先端技術研究センター・
大学院工学系研究科都市工学専攻教授

飯田泰之

明治大学政治経済学部准教授

なぜ、中規模都市にナイトタイムエコノミーが重要なのか

——飯田先生は、まちづくりとしてのナイトタイムエコノミーを考える時に、重要なのは都市の規模だと指摘され、とくに中規模都市の経済の活性化を重視されていますが、それはなぜか。その辺りからお話を始めていただけますか。

飯田——中規模都市として僕がイメージするのは、中心地域人口が20万人、そこに通勤する周辺地域に20万人くらいが住む、経済学でいう「都市雇用圏」の人口が40万人ほどの規模の都市です。たとえば各県の県庁所在地と、もう一つあるかどうかという程度に大

きな町です。というのも、企業活動や商売、総合病院や複数の高等学校など、生活に必要なインフラを揃えて「都市としての経済」を維持していくには、このくらいの人口が必要だと考えるからです。

とくに「まちづくり」という視点から考えても、このくらいの規模がないと「都市」としての魅力が発信しにくいし、人を惹き付けることが難しい。もちろんもっと小さな村落や山間地域の町にはローカルな別の魅力があり、成功したまちづくりの例も多くあります。一方で、都市であることの力を活

用した経済活動と考えると、エリアで30万人、できれば40万人規模であることが望ましいと思っています。これは、都市をどのような場所と考えるかにもかかわってきますが、一つには、いろんな店が出せる最低の規模なんです。これ以下の人口では、ちょっと変わった店や、実験的だったり先鋭的だったりする店が出しにくくなり、都市の要件である「多様性」を育むことが難しくなる。そうすると都市としての魅力がない町になってしまうのではないかと思います。

オックスフォード大学のニック・ポータヴィーは、さまざまな価値を金額に換算することで有名ですが、彼は、友人や知人と頻繁に会うことができる価値を年間10万ドルと見積もっています。たとえば首都圏で働いて通勤に往復2時間以上もかかって、友人・知人どころか家族とも交流の時間を取れないような生活は、年間10万ドル損しているということになるわけですね(笑)。これからのまちづくりは、そこに住み暮らす人のQOL(クオリティ・オブ・ライフ)が重要です。通勤時間に余裕をもち、親類や旧知の友人とのつきあいが続く町と都市での生活を両立できるのは中規模都市ではないかと考えています。だからこそ経済政策としてもその衰退回避を考えないといけない。

小泉——そうですね。県庁所在地やそれに準じる中規模都市がダメになると、日本の地方圏が総崩れになってしまうという危険性は、都市計画でもよく指摘されています。できれば大学までの高等教育がその都市圏内にあって、卒業してからも住み暮らせる雇用

条件が整っていると良いのですが。しかし、たとえば自然環境へのアクセスや、飯田先生が指摘された通勤時間などは地方都市の方が圧倒的に条件が良いわけですから、そうした利点を活かして、若い人たちがQOLが高いことに惹かれるようなまちづくりを進めることはとても重要な課題だといえますね。

飯田——大学は重要です。40万人よりもう一回り規模が大きくなると、国公立大学以外の大学が存在でき、多様性はより豊かになる。

小泉——しかし地方都市では私立大学の経営が成り立たず、公立化が進んでいるのが現状です。地域として大学を維持することは重要ですが、実際には人口100万から200万人の大規模都市の大学に進学し、そのままそこで就職するか、東京に出てしまう人も多い。大学が、優秀な人を地方の中核都市や首都圏に送り出す装置になってしまっているんですね。人口40万人ほどの中規模都市は、ミニ東京ではないQOLを見つけ出す必要があると思います。

飯田——ミニ東京を競うと、東京はもちろん7大都市圏にはどうやってもかありません。最近私が注目している盛岡や松山は周辺地域を含めて40～50万人くらいのエリアですが、若者向けの店もそれ以上の客層の店も一通り揃っていて、夜の繁華街も比較的元気です。地元の学校を軸としたコミュニティも維持されている。松山の商工会議所はすぐに松山大学のOB会になっちゃうなんて話も聞きます。地元の大学が、東京ではなく地域社会にしっかりと目を向けるだけでも、卒業生の循環

が生まれ、そこにシビックプライドというような気分も生まれてくるのではないのでしょうか。

今の日本は、地域社会に踏みとどまることが重要で、東京だけに一極集中する状態は決して望ましくないと思っています。東京からI・Uターンで地方に移住したいと考える人は増えているそうです。もっとも、実行する人はまだまだ少数のようですが、大都市圏で働く人たちが、自分のたちのQOLに疑問を抱き始めていることは間違いのないと思います。ですから今地方の中規模都市は、その受け皿になれる可能性があるわけです。ただ大きな問題は、女性にとってのディーセント・ワーク(働きがいのある人間らしい仕事)が地方にはまだ不足している感は否めない。地域によっては男女格差もまだまだ根強く残っていますね。

小泉——男女の平等や働く機会の均等等など、人がそこで住み暮らすうえでの公平性は、むしろ東京を始めとする大都市圏が特異点的に発達させているのかもしれない。しかし、因習や慣習にとらわれない公平性が確保されていることは、村落共同体とは異なる、都市の大きな要件の一つと言えるかもしれませんね。

飯田——たとえば夫婦で大都市圏から地方へIターンやUターンする場合には、むしろ奥さんの仕事や日常生活の問題が大きい。だから、奥さんの故郷へ移住する方が、旦那さんの故郷へ移住するケースよりスムーズだという話を聞きます。いずれにしても男性も女性も両方のディーセント・ワークが実現できなければ、その都市には移住しにくいということだろうと思います。

東日本大震災支援からの縁で、僕は船渡市にうかがうのですが、震災を機に外からたくさんの人が来るようにな

ったおかげで習慣が変わったりとか、いろいろ良い刺激を受けたと言う人もたくさんいました。

都市の多様性。その一つとしてのナイトタイムエコノミー

小泉——一口に地方の中規模都市といっても、たとえばある県では、一定年齢以上の女性の運転免許の取得率が低いというように、その土地ならではの特色があったりします。これは日本で女性が運転免許を取得し始める1980年代でも、「女性は運転なんてしないでいい」のような風潮があって、免許を取らなかった女性が多かったからです。クルマがなくては日々の買い物もままならない地方都市では、高齢者の運転ミスによる交通事故が大きな問題になっていますが、一方では高齢女性が一人暮らしになると、からだが悪くなくても、クルマの運転ができないだけでどこにも出かけられなくなってしまいう問題もあるわけです。

そういった高齢化の問題や地域それぞれの問題を抱えつつ、地方の中規模都市がどのようなまちづくりを進めていったら良いのか。とくに今日のテーマは「ナイトタイムエコノミー」ということですが、その辺りの可能性は、どんなふうに考えておられますか？

飯田——やはり町としての面白さ、でしょうか。もちろんその前提には稼げる地域という条件があって、先ほどの盛岡や松山のようにその都市圏で稼ぐことができれば、そこに住み続けたいと考える人は多いでしょうし、U・Iターンを希望する人も少なくないと思います。で、その町で何らかのビジネスを展開するためには、フォーマルな場所から猥雑な場所まで、さまざまな表

情があり、そこにいろんなタイプの人がいることが非常に重要になってきます。多様性があればいろんな人を呼び込むことができます。地方都市の仕事というと、公務員や地方銀行、建築や土木などのインフラ関係に限られがちですが、仕事の幅が広がれば、そこに住みたいと思う人の幅もまた広がるんじゃないでしょうか。

そこでナイトタイムエコノミーの話にもつながりますが、東日本大震災後の岩手県の沿岸部には、飲食店をまとめたスナック団地のような場所がいくつかできました。するとそこが地域の社交場になっていくんですね。震災以前はぼつりぼつりと点在していたスナックやカラオケ店が、せいぜい10軒程度でも小さなエリアに集まると、それに魅かれて人が集まるようになる。そしてそれらの店をハシゴできるようになりますし、運転代行サービスの手配も効率的になる。その結果、地域にとってその場所の重要性が高まってくるといふ推移が見られました。飲食店が同じ数あっても、点在するか集積するかでその印象や魅力は大きく違ってくる。人口減少時代を迎えている地方の中規模都市にとっては、そんなことも何かヒントになるんじゃないでしょうか。

小泉——物販を主とする商店街は寂れてしまっても、スナック街は結構ちゃんと残っている地方都市はまだたくさんありますね。むしろ首都圏より

も通勤時間が短い地方都市の方が、仕事帰りにちょっと飲んでみんなで楽しむという文化が善くも悪くもまだ残っていて、それが地域経済の一端を担っている面はあると思います。そこに、ちょっとおしゃれに食事ができるような店も増えてくれば、女性も楽しめる。昼にも夜にも多様な楽しみ方があることは、町の再生や活性化の大きな指標になるのかもしれない。

昨年たずねた富山県の高岡は従来の繁華街も栄えていましたが、空き家の再生にも力を入れていて、そういうところに面白い店ができて、20代後半から40代の比較的若い人たちが集まっている印象でした。この空き家再生を主導しているのも、首都圏の大学を卒業して不動産関係で働き、資格をもってUターンしてきた女性でした。自分の専門性を活かして新しく起業する人を中心としながら、町にいろんな人たちが新しい居場所ができていく。これは、今地方都市に生まれている新しい潮流の一つかもしれません。

飯田——先ほど挙げた盛岡の雇用圏はやや広めに考えると花巻まで含みますが、その中間にある紫波町は、駅前には公共施設やショッピングモール、病院、宿泊施設を集積させる「紫波中央駅前都市整備事業(オガールプロジェクト)」を2009年から推進し、家族で楽しめるまちづくりとして注目されています。その背景には、これまでの町の構成、とくに古い地方都市などは、女性や子どもは家にいて男は外で……といったように、古い慣習や価値観できている部分も大きく、家族みんなで利用して楽しむような、新しいライフスタイルに追いついていなかったとい

う側面も挙げられると思います。

通販の拡大で物販店の経営が難しくなってきたのは首都圏も同じですが、飲食はそのお店へ行かないとできない強みがあります。飲んだり食べたりだけではなく、そこに集まってただらするにも場所が必要です。その意味で飲食店は利用者にとって付加価値が高く、税金として地元に利益が還元される点で、とくに個人経営の飲食店は地域にとっても付加価値が高い存在です。工場誘致を最大使命のように考えて

ナイトタイムにさまざまな人が町にいることの重要性

小泉——現在は国土交通省が主導して、中心市街地に多様な施設を集積させる「コンパクトシティ」や「コンパクトシティ+ネットワーク」が全国各地で進められています。しかし、地方自治体の担当者は、地方都市ではその核として全国展開しているショッピングモールの誘致を望む声もあるという。ただしこれも今のお話のように、そこで消費しても多くのお金は本社のある東京に流れてしまうわけです。

飯田——コンパクトシティに伴って駅前を再開発して、新しい立派な建物に変えてしまうと、高くなった家賃を払えない地元の企業や個人経営のお店を追いつぶすことになりがちです。そうすると高額の家賃・保証金を払えるナショナルブランドのチェーン店やコンビニばかりが入居することになる。結果、全国どこへ行っても同じような駅前の風景ができあがってしまう。しかも、全国チェーンですから売上のほとんどは本社のものです。

その対策として、行政が安い家賃で「チャレンジ店舗」を公募する制度も

いる行政は今も多くありますが、工場や大手のチェーン店は売り上げが東京や大阪の本社に行ってしまうから、地域経済にはあまり貢献していないとも指摘されています。むしろ個人が経営する店や会社、つまり社長がそこに住んでいることが、地域の経済循環にとってはとても重要なんですね。東京は、年間約21兆円を本社利潤として地方から集めています。これでは、地方が豊かになるのはなかなか難しいのではないのでしょうか。

ありますが、行政が審査するとほとんど「郷土料理」のお店になってしまったり(笑)。しかし地元の人にとって郷土料理は家で食べるものですし、観光客は、駅前のビルの中の郷土料理店には入りたがらない。で、結局撤退していくケースが多いようです。

チャレンジ店舗として選ぶなら、むしろバーやイタリアンのような地元の若い世代に人気が出るようなお店を選んだ方がいいかもしれないし、そもそも家賃の高い新しいビルに建て替えるよりも、リノベーションなどで工夫して家賃を抑えて、地域のお店が元気に営業できるような駅前や中心繁華街を考える必要もあるのだと思います。

小泉——最近では若い人たちが、商店街の空き店舗などをリノベーションして个性的なお店をつくって、それが町の魅力づくりに貢献している例も見られるようになってきています。そこでも問題になるのは、先ほども話に出た「一定程度の集積」だと思います。とくに周辺地域から中心市街地へと人を呼び込むには、「デパートでお買い物」



小泉秀樹

こいずみ・ひでき—1964年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了。東京大学先端科学技術研究センター・大学院工学系研究科都市工学専攻教授。博士(工学)。専門は、まちづくり・コミュニティデザイン。本誌企画委員。編著書に、『コミュニティデザイン学』(東京大学出版会、2016)、『都市・地域の持続可能性アセスメント 人口減少時代のプランニングシステム』(学芸出版社、2015) 他。



飯田泰之

いいだ・やすゆき—1975年東京都生まれ。東京大学経済学研究科博士課程単位取得退学。駒澤大学経済学部准教授を経て、現在、明治大学政治経済学部准教授。専門は、マクロ経済学、経済政策。
著書に『経済学講義』（ちくま新書、2017）、『マクロ経済学の核心』（光文社新書、2017）、編著書に『これからの地域再生』（晶文社、2017）、『地域再生の失敗学』（光文社新書、2016）他。

というような、かつての物販を核とした位置づけではもう成り立たなくなっているわけです。ですから、いろんなお店やサービスが集積したさまざまな「楽しめる空間」があって、「今日はここここに寄って、ご飯でも食べて帰ろうか」というようなストーリーとしての吸引力が生まれるようなまちづくりも必要だと思います。

さらに言えば、中心市街地にも多くの人が住み、そこに日常の生活があることが望ましいと考えています。新潟県の長岡では住まいとしての町の再生に取り組んでいて、町の中心部にマンションを建てたり、空き家などを利用して、学生も含めた若い人たちが比較的安い家賃で暮らせるような工夫も始めています。

こんなふうに中心都市部に暮らすことは、そこに住みながら働けるリブワーク、つまり職場空間と住空間の近接を可能にすることで、中心都市部で仕事や勉強をしながら、夜はみんなでご飯を食べて解散するというような町の楽しみ方がしやすくなる。まず住まう場としての環境を整えることが、飲食店などを活性化させ、ひいては町全体を活気づける原動力ともなるのではないのでしょうか。

飯田——今、中規模の地方都市の多くは中心市街地の衰退で空き家が増えていきます。そこにちゃんと手を入れて、大学生や若い会社員に格安で提供できれば、彼らにとっても地域にとっても良いでしょうね。若い人たちにはたくさんの時間がありますから、いろんな経済活動をしてきて、それが町の活性化にもつながる……。

小泉——僕がまちづくりをお手伝いし

ている愛知県の豊橋は、大学がみんな郊外にあるので自動車通学の学生が多くて、なかなか町の飲食店には立ち寄れません。先ほど話に出た長岡には町なかに国立の長岡技術科学大学の研究室があって、この20年ほどずっと町なか再生に取り組んできた先生のリードで、大学も積極的に学生を町に呼び込む取り組みを行ってきました。そうすると若い人たちが町を行き交うようになり、それを目当てに飲食店が増え、住宅も建つようになって、長岡はだいぶ息を吹き返したという印象です。

大学がその地域の核となって町なかを支えながら、そこにいろんなお店やサービスが出てくると、昼夜を問わず楽しめる地域になっていくかもしれませんね。

飯田——かつて大学周辺といえば、喫茶店や飲み屋など、その大学生しか行かないような店がたくさんあったと聞いています。けれども、今僕が在籍する明治大学のある東京の御茶ノ水界限は、地価の高騰もあって、学生たちが気軽に安く呑めるお店がなくなってしまう、コンパの場所にも困っている状況です。それに比べると地方の大学のナイトライフには、大都市圏の大学とはまた違った魅力が期待できるかもしれません。

小泉——そうですね。東京での学生生活に経済的負担がとても大きくなっていることは大きな問題だと感じています。居住費も高いし、飲食も高い。何をするにも高いので、お昼ご飯は学食で済ませようとする、学食はひどく混んでいて長蛇の列、という具合です。

東京では人やモノの集積が過剰に進んだことで、学生や若者、ローミドル

の人たちの居場所となるような、言ってみれば効率の悪い店がどんどん淘汰されて、この町を楽しむことができる人の多様性を奪いつつあるような気が

住民のQOLを高めるナイトタイムエコノミーの必要性

——話をナイトタイムエコノミーに戻しますと、中心市街地はかなり衰退していても古いスナック街はまだまだ元気な地方都市が多いことから、お二人は飲食店に着目されているわけですが、しかしそういう場所はおっぱら男性客ばかりだということですね。これは飯田先生のご指摘のように、町のつくり方が新しいライフスタイルに対応していない問題もあると思います。そこで、夜の町を楽しく豊かにするためには、女性や家族連れが気軽に行けるような仕掛けが必要だと思うのですが、その辺りはいかがでしょうか。

飯田——人口40万人を中規模都市圏を一つの目安としたのには理由があります。このくらい人口であれば都市に匿名性が出てくるのです。本格的な田舎では誰もが顔見知りで、ほんの数件しかない飲み屋に行くと知った顔にしか出会わない。すると、その人がどんな人で、どこで何をしているのか筒抜けにわかってしまうわけです。それでは、とくに女性は日常から解放されにくいし、常に周囲の目を気にした行動を強いられるわけです。男女格差が根強く残っている地域ではこの傾向はさらに強いでしょう。

けれども人口が40万人を超えるあたりから、立ち寄った飲食店で見知った顔に出会う可能性はぐっと低くなり、匿名性が保たれるようになる。そうすると、たとえば女性同士で夜更け

します。この偏りは、都市の持続性を大きく損なうものではないかと危惧しています。

まで飲み歩くことも自由にできる。この匿名性は、先ほど小泉先生が指摘された共同体の因習や慣習から個人が解放される一つの目安であり、地方都市でナイトタイムエコノミーを考えるうえでは、比較的重要な視点だと思います。

40万人を超える都市であれば、たとえばバーのオーナーとか、居酒屋を何件か経営している社長さん、夜間そこで働く人というような、昼に出会うと一見何をしているかわからないような人も住み暮らすようになるでしょう。昔風に言えば「インフォーマルセクター」の人たちですね。彼らは多様なバックグラウンドをもち、多様な人生経験を積んだ人も多く、町にこうした人が増えることが、さらに多様な人たちを惹き付ける都市の魅力ともなっていくと思います。いわばナイトタイムエコノミーは匿名性とセットで活性化し、都市の魅力をつくっていく可能性がある。

ここで重要なのが「寛容さ」だと思います。ある種の「いい加減さ」と言っているかもしれません。インフォーマルセクターの人たちのなかには、世間一般ではあまりほめられない経歴の人もいるでしょう。あるいはセクシャルマイノリティーやアウトロー的なアーティストなど、いろんな志向や考え方をもつ人たちが集まってくる。そういう人たちとの共存を受け入れること

対談

小泉秀樹

飯田泰之

が必要だと思います。

今いろんな地方でロックフェスティバルなどの催しが開催されるようになっていますが、事前に開催時間などを取り決めて行政とも了解ができていないにもかかわらず、「音がうるさい」とか「夜遅くまで若者がブラブラしていて困る」という住民からのクレームが来る地域は少なくない。むしろ若者を呼び込んでブラブラしてもらうために開催するフェスティバルなのに、いったいどうしたらいいのか……、と主催者が頭を抱えているという話も聞きます。

小泉——先ほどもお話ししたように、できるだけ偏りなく、いろんな人がその地域で住み暮らせることが都市の要件の一つだと僕は考えています。都市が極端に特定の階層だけに住み心地の良い場所になってしまうと、社会的対立を生んだり、アメリカのように極端な場合には暴動さえ起こりかねません。ですからどうやって多様な人を取り込むかは、非常に重要なポイントだと思います。

飯田先生が指摘された匿名性と多様性に対する寛容さは、確かに都市におけるまちづくりの基本的な態度だと思います。ただ、だからこそ「社会的関係性」がいつそう重要になるのではないかと考えています。先ほど飯田先生が挙げられた、友人や知人と会って話をする、年間10万ドルの価値のあるような社会的な関係性ですね。そういう関係性は都市の機能や構造の側からでは見えにくくて、それゆえある程度の匿名性が保たれるわけですが、その人の側から見てみればしっかり社会とつながっている、そんな関係性が根付

いていることが大切だと思います。

東京では、1人ひとりが極めて機能的なライフスタイルを送るように仕組みられています。大企業の社員であれば、企業人としての役割を最大限発揮するように最適化されているはずです。仕事を巡る人間関係は会社の利益のための社会的関係であって、その人個人を支えるような人間関係になっていないことも往々にしてあるでしょう。かつての企業にはあったかもしれない濃密な人間関係も、今日の高度な情報化やセキュリティ管理体制のなかで、どんどんと失われているような気がします。

こうした東京のライフスタイルと比較すると、40万人の中規模都市から、もう少し大きな規模でもいいでしょうけれど、その程度の規模の都市であれば一定の匿名性を確保しながらもその人を包み込むような社会的なネットワークがつくりやすいのではないかと思います。グローバル企業の働き方とは明らかに異なる地元企業で働き、職住の接近したゆとりのある生活があり、適度に都市生活が享受できるなら、そうしたライフスタイルを選択する人も増えてくるのではないのでしょうか。

先ほどお話しした空き家再生の活動を展開する人たちは、地元の有志たちと夜集まって議論を重ねたりしています。それができるのも、そこで暮らし、そこで働き、すぐに集まることができる距離感のなかで生まれている関係性だからでしょうね。そうした若い人たちのネットワークが、多様な人たちの想いを取り込むことで、地域再生の重要な一翼を担いつつある。その、人を取り込むような社会的関係性が重

要で、人にしろ、場所にしろ、仕組みにしろ、そういう関係性が生まれやすいような都市は、おそらくナイトタイ

働き方の意識を変えてナイトライフを楽しみたい

飯田——地方の中規模都市には、世代別にキーパーソンのネットワークが何となくできていて、キーパーソンを中心としたグループがいくつか存在するようです。それらが少しずつ重なりながら、どこかで青年会議所や商工会青年部のような半ば公的な動きとつながると、小さなグループの垣根を越えた地域コミュニティの力が発揮されて、いろんなムーブメントが生まれたりするんですね。

一方首都圏のような巨大都市にはコミュニティはもっとたくさんありますが、多すぎて全体が把握できず、みんなが一緒になって一つのことに取り組むには、かなり政治的な立ち回りが必要となってきます。たとえば東京で商店街を再開発しようとなったら、もう地元の青年会の話ではなく、区がからみ、都がからみ、デベロッパーがからんでくるような大事になってしまう。規模感がそこまで大きくないということが、コミュニティの力が一番発揮できる状況ではないかと思います。

小泉——京都大学の総長でサル学で著名な山極壽一先生は、動物としてのヒトが認識できる個体数はせいぜい150くらいだとおっしゃっていました。文化人類学的に見ても、古いヒトの集落は150人程度、世帯数で30から50くらいが一つの単位となっているそうです。これは全員が家族のようにわかりあってしまう非常に濃密なコミュニティですが、その対局には識別できる150人

ムが充実していて、いろんな人が楽しめる都市になっているような気がします。

が、日々どんどんと入れ替わっていくような東京のような巨大都市の暮らしがある。その中間のちょうどいい規模感、つまりある程度の流動性や匿名性をもちつつも、10数人から20数人の規模で結構濃密な関係が維持できて、時には彼らを支え、時には彼らに支えられながら暮らしていくことができれば、それは動物としてのヒトにとっても、一つの幸福な環境でありライフスタイルだといえるかもしれません。

そういうライフスタイルの基盤があって、そこに都市としての仕掛けをうまく提供できれば、社会的関係の再構築に役立つかもしれません。もちろん飲食店も良いのですが、姫路駅前の整備事業では、駅前に芝生の広場をつくりました。晴れた夜には星空を見上げる大人向けの座学なども開催され、そういうプログラムが新しい関係をつくるきっかけともなっているようです。——大都市にあるような消費するナイトタイムエコノミーではなくて、社会的な関係性をつくり、住む人のQOLを上げていくようなナイトタイムエコノミーですね。

小泉——ええ。もちろん地方の中規模都市だからQOLを上げるナイトタイムエコノミーが成立しやすいかといえ、必ずしもそういうわけではありませんが、でもその可能性に向けてトライアルアンドエラーを重ねることは大切だと思います。

飯田——たとえば東京では団塊の世代

が中心となって、若手の落語家を後押ししながら自分たちも楽しめる落語会など、小さなサークルで主催するナイトタイムエンターテインメントが盛んに行われるようになってきています。なぜ定年退職後の団塊の世代かという、若い人たちは仕事で忙しくて、とてもそんな余裕がないんですね。でも地方都市に住んで、通勤時間に余裕があったり、自営業者であれば、若い人でもそういう社会的な活動ができるようになるわけです。

ここで重視したいのが町の稼働率です。一般的には、店舗や施設を昼夜共できるだけ長時間利用することで経済効率を高めようという文脈で語られますが、住民のQOLを向上させるようなまちづくりでは、単純に施設を24時間使うということでは成立しません。むしろ町という大きな器に多様な人々が住み暮らし、その人たちにとってどれだけ町が有効に機能しているか、その指標として捉えた方がいいんじゃないかと考えています。

人が居住していれば、寝ていてもそこを占有していますから、稼働率は極めて高い。ですから町なかや近接地に

居住スペースがあることで、エリアの稼働率は一気に上がる。町全体の使用効率が高いことが本当の意味でのコンパクトシティであって、活動水準の高いエリアがギュッと集中しているような都市を目指していくことが、たとえば中心市街地の活性化には必要なんじゃないかと思います。

あたりまえですが、パソコンの処理速度が倍になったからといって文章の面白さが倍になるわけではありません。今の経済は量的な拡大から質、それも縦の品質ではなく横のバラエティを問うものになってきています。多くの人は経済性かQOLか、どちらを取るのかと対立的に考えがちですが、むしろ僕は、QOLが上がるのが経済的な生産性を高めることにもつながっていると考えています。その転換点は、もうとっくにきている。

小泉——そうですね。ナイトタイムエコノミーだからといって、公共交通機関を一晩中走らせればいいということではありません。もちろんそういう対応があってもいいけれど、重要なのは夜の活動が盛んになることで地域社会の人間関係が濃密になり、結果的に経

済的な活性化にもつながるということなんですね。

飯田——たとえば放課後の小学校を塾に開放するとか、大学で夜間の語学スクールを開設するとか、学びのナイトタイムエコノミーを積極的に展開するとか……。

小泉——学んだ後は、みんなで食べたり飲んだりできるしね(笑)。ただ、それで帰宅が深夜になったり、公的な施設や交通機関が夜遅くまで営業するというのは少し違和感が残ります。以前僕が住んでいたシアトルでは、午後の4時5時には仕事から帰り、そこからみんなと合流してウォーターフロントでバーベキューをしたり、ヨットやカヌーを出して遊んで9時頃に終る。市民がそんなふうにナイトタイムを楽しんでいたのが印象的でした。

日本で豊かなナイトタイムを実現するには、まず働き方から変える必要があるかもしれません。夜の9時や10時に仕事を終えて「ちょっと一杯」なんて、かなり昭和的ですよ(笑)。豊かなナイトタイムを許容するような社会や地域、企業があり、職住の近接による短い通勤時間や時間的にも精神的にも余裕のある生活。そういう条件が揃わなければ、本当の意味でナイトタイムを楽しんで、そこで楽しく消費したり、学んだり、活動する日常には、なかなかならないと思います。

首都圏や大都市のように娯楽の提供と消費が明確に分かれているのではなく、楽しむ側とサービスを提供する側が、相互に入れ替わりながら町全体の稼働率が上がっていくような、そんなナイトタイムエコノミーのかたちを目指したいですね。



お楽しみはこれからだ

アフターファイブのまちづくり

人間の消費というのは、町に出て買い物をしたり、何かしらの施設を利用し、サービスを楽しんだりという現在進行形の「人間の営み」のなかにしか生まれないという。たとえば、消費という観点から観光消費が注目されるが、人は、文化財や自然景観に感動はしても、それだけでお金を落とすことはない。消費意欲を喚起し、消費機会を誘発する何らかのアクション（働きかけ）が必要になってくる。ナイトタイムエコノミーが注目されるのは、まさにそれ／そこが「消費の時空」であり、さらにはクリエイティビティが発揮されるアクションの場として励起するからに他ならない。ナイトタイムエコノミーを活性化させる仕掛けをどのように作り出すか。その要件について語り合っていた。

photo:坂本政十賜

木曽崇

国際カジノ研究所所長・エンタテインメント
ビジネス総合研究所客員研究員

木下斉

一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンス
代表理事・内閣官房地域活性化伝道師

世代交代のタイミングは、町が大きく変わるチャンス

木曽——ナイトタイムエコノミーの振興がなぜ必要かといえば、一番大きな枠組みでいうと、日本の経済活性化のために消費機会を創出することです。世の中には「お金はあっても使う場所がない」「忙しすぎて使う機会がない」という人がたくさんいます。そこに対して消費機会を社会的につくり、消費として活用されていなかった時間帯を、需要創出ができる時間帯に変えていくというのが、ナイトタイムエコノ

ミーの考え方です。

お金を使っていただく対象は、居住者だけでなく、観光で訪れる人も含まれます。とくに近年は、観光振興への取り組みで、ナイトタイムエコノミーへの関心が広がってきています。観光地を訪れる方は、お金を使う準備をしてきてくれるのですから、寝る時間以外はすべて消費をしていただくのが理想です。しかし、現状の日本の町を見ると、陽が落ちてからはお金を使

う場所がどんどん減ってきていて、中核都市であっても夜8時くらいになるとシャッターが閉まり、消費する機会がない。観光都市は、消費機会を損失しているわけです。わかりやすい例でいうと温泉旅館はチェックインした後、6時半くらいから夕食が始まりますが、2時間ほどお酒を飲みながら食事をする、8時から8時半くらいです。その後は卓球くらいしかやることがない(笑)。観光客が食事をした後に、もう一度町に出ていただく機会をつくらなくてはいけないと、いろいろな場でお話しています。

木下——たとえば九州では、昼間は商店街の固定店舗が営業し、夕方に閉店すると軒先を屋台出店のために貸していた時代がありました。ただ、1964年の東京オリンピックを一つの契機にして、屋台は衛生面で問題があり、前時代的なものであるという意見をもとに規制されていくようになります。一部には実店舗を構えたりしましたが、屋台のような軽い業態ではなく、店舗を設けてしまうと、夜の営業だけでは経営が成立しない店が多く、なくなってしまったという現実があります。北九州も熊本も一部にだけ残ったりしていますが、独自の政策で残した福岡市ほどは屋台は残っていません。残した福岡市は逆に観光資源になり、むしろ時代が変わって公募して屋台を許可していく方向に変わったのは印象的でした。

ニュータウンなどの開発も同じです。戦後、住宅が足りない時代は、同様にモノも不足していたため、商業は何をやっても儲かった。そんな時代に開発されたエリアが多くあります。そ

のため、当時のニュータウンではほとんど商業について配慮されていない。住居や公共施設が優先され、動線設計も積極的になされませんでした。さらに、昼の商業・夜の商業をどうプランニングするかは考慮されておらず、とくに夜の商業などは健全な住宅環境にはマイナスということで、ニュータウンの駅前や裏路地に飲み屋がつくられることもありませんでした。その結果、大店法などが改正されて商業競争が激化した90年代以降、有利な動線などが設計されていないニュータウンの商業床は空き店舗が急増してしまいました。最近の都市計画分野の中堅・若手世代は、そういった裏路地に自然発生してきた屋台や飲み屋街などを、ポジティブに解釈するようになってきていると思います。

木曽——ナイトタイムエコノミーについても、やっと社会の受け止めがプラスに転じてきたという感じはしています。私も含めてなんですけど、夜の業界にいる人は、水商売という括りで、社会的に地位が低いものだという扱いを受けてきました。また夜の業界にいる当事者も、劣後感をもちながら生きてきたのも事実です。しかし、ようやくそうした偏見はだいぶ解消されて、フェアに見てくれるようになりました。

一方で、夜の業界にいる人たちも、地域の商店街の活動などに消極的だったという問題もあります。夜の世界だけでコミュニティをつくってきた。地域活動に参加しなければ正当な評価を得ることは難しいわけで、それも分断の要因の一つでした。

木下——かつて「グリーンバード」と

いうゴミ拾いのNPOのアドバイザーをやっていた時のことです。歌舞伎町のチームはホストクラブのメンバーと一緒に、自分の店の周辺だけではなく、駅前から商店街までゴミ拾いをしていたのですが、やはり当初は商店街と飲み屋街など一般の小売、飲食店舗とホストクラブなどの飲み屋街との間には断絶がありました。しかし、ゴミ拾いなどの機会を通じて、多少なりとも歩み寄りができると、関係性は確実に変わりました。

木曽——他の地域でも同じようなことは起こっています。朝、自分たちの仕事が終わった後、地域のゴミを拾って歩くという活動です。渋谷のダンスクラブの業界団体は、もうここ数年ずっと営業が終わった後、早朝に地域のゴミ拾いのボランティア活動をしています。ゴミという具体的な問題の解消のために、両者が歩み寄ろうとしているわけです。

木下——経営者の年齢もどんどん若くなってきて、意識が変わってきたなと感じます。取り組み自体もネットで共有し、いいことは躊躇せずまねしてすぐに実行する。若い経営者の最近の傾向です。

もっとも、世代間の考え方の違いがあるのは仕方がないことだとも思います。昔は不動産をもっていたら資産価値が上がって、土地担保で与信力もつけていくことができました。黙っていても資産が積み増しされ、事業に必要な資金を調達でき、俺が俺が、でやれた時代です。一方で、今の若い世代は物件や資産をもっているわけではありません。集客などを強く意識し、着実に稼ぎを大きくして、事業性の高いビ



木曾 崇

きそ・たかし—1976年広島県生まれ。国際カジノ研究所所長。ネバダ大学ラスベガス校ホテル経営学部首席卒業（カジノ経営学専攻）。米国大手カジノ事業者グループでの会計監査職を経て、帰国。2004年、エンタテインメントビジネス総合研究所へ入社。2011年に国際カジノ研究所を設立。著書に『「夜遊び」の経済学…世界が注目する「ナイトタイムエコノミー」』（光文社新書、2017）、『日本版カジノのすべて…しくみ、経済効果からビジネス、統合型リゾートまで』（日本実業出版社。2014）他。

ジネスを構築して資金調達をしていなくてはなりません。そして個々の事業にできることだけでは限界もあるので、相互に建設的な連携をして商売を伸ばそうという協力関係について意識的に行動するようになっていきます。だから世代間での意識の違いは、そもそも置かれている環境や、生きてきた時代が違うのだからあたりまえです。

木曾——町が変わるきっかけの一つに、町そのものの世代交代のタイミングがあります。とくに戦後大きくなった町が、今、全国にたくさんありますが、ちょうど今は戦後の第三世代なのです。たとえば、町の主役が30～40代に代替わりする時に、保有している不動産の取り扱いの方針も変わる。祖父や父親が管理していた時代は、「この家賃じゃないと絶対に貸さない」と言っていたのが、今の30～40代がオーナーになると、「そうは言っても空けておくのは良くない」と別の考え方をするようになる。戦後に一気に大きくなった町は、みんながいつせいに代替わりしますから、町も一気に変わります。私の実家がある尾道も今まさにそういう状況です。ここ5年くらいで驚くほど、町が変化しています。

木下——経済は与えられるものではなく自らつくるものだと思います。やはり拡大する時代に乗っていた時のやり方と、縮小する時代にも成長の余地をつくっていなければいけない時のやり方は違ってくるので、世代交代はすごく大きいポイントですね。

私がかかわった北九州・小倉でのプロジェクトも一緒に、父親の代から息子の代に資産が移ったタイミングでプロジェクトがスタートしています。意

思決定の基準も、プライドもリセットされるのです。父親世代の「うちは一等地だ」というプライドはなかなか崩せないものがあって、若い人、創業したての方に物件を貸すことは、経済的な問題以上に心情的に許せないという人もたくさんいました。それが世代交代のタイミングで、裏通りから変化が始まりました。新たなお店を誘致し、用途まで変えていくリノベーションまで展開し、今では道路占用のための国家戦略特区として、夜間には裏通りに面している各店舗で客席のはみだし出店ができるなど、大きく町が変わりました。じつはやり方を変えればまだまだ地方の厳しい立地でも成長余地があるのがわかるケースです。路地裏から変わっている例は、東京の港区や大阪の難波、熊本など各地でも見られます。逆に言うと、資産所有者の世代交代のタイミングで町が変われないと厳しいかもしれないですね。

与えられている条件、たとえば人口減少などを過剰に悲観的にとらえ、全体の不幸と個人の不幸が連動してしまっている人もいます。土地の値段のようには全体が下がるともう終わりだと思ってしまう。なぜ、自分のところだけ地価を上げようとししないのか。北九州市・小倉のプロジェクトなどは、局地的に地価は上がっています。何十万人規模の都市圏で1カ所のストリートの価値が上がることは少なくない。店を出したいという人が増えたり、住みたいという人が増えたりすれば必然的に地価は上がります。もっと自分に自信をもってもいいと思うんですがね。

◆中心市街地の優位性は、「まち歩き」と「お酒」

木下——みなさん経済効果という言葉に振り回されすぎているんじゃないでしょうか。B級グルメやイベントでまちづくりをしても、はっきり言って地域の経済効果には結びつきません。B級グルメなどのイベントは、誰もが参加できる事業ですが、実際にかかるコストに対して、見合うだけの儲けが地域で出ると言われれば、必ずしもそうでもありません。数百円、数千円の消費でとりあえず時間をつぶすにはいいという感覚。その後イベントのためにつくられたご当地名物のB級グルメだけで実際に地域内で多数のお店が経営が続くかといえば、そういうことはありません。みんなお金を払ってまで食べに行きたいとは思わないわけです。飲食店として個人がやったのであればよいのですが、地域活性化事業として税金を使ってまでイベント開催するのは馬鹿げています。来場者数などから経済効果があるといっても、それは当てにならない。事業としてしっかり収支を合わせるのが基本でしょう。

利益を上げたといっても、昼の商売の純増分ではないというところが問題です。その点、中心市街地でやっていなかった夜の経済開発は、もともとないところに新しいマーケットをつくるということですから、やれば純増分としてカウントできることがポイントです。我々がやっている中心市街地の再生においても基本は同じ。屋間の消費を取り合うイベントをやっても仕方がなくて、「市場創造」という発想が重要です。

木曾——日本の中心市街地活性化は、駅前にデパートを誘致するなどの大型

開発をしますが、それでは勝てません。中心市街地活性化においては、郊外型の大型ショッピングセンターと同じようなものを駅前につくっても意味がない。なぜ消費が郊外型のショッピングセンターに移っているかという、クルマで行けて便利だからです。そもそも中心市街地には駐車場もないし、建て込んでいて道も狭い。大型の商業施設をつくっても人は来ません。郊外と同じことをやるのではなく、中心市街地にしかできない活性化の方法を考えるべきです。

私は、基本的に二つだと思っています。一つは「まち歩き」、もう一つは「お酒」です。これは両方ともナイトタイムエコノミーの文脈にあるものです。大型ショッピングセンターが提供できないものといえば、多種多様な商店が存在している町そのものを提供すること。そこで散策をするという行為は、中心市街地の魅力になります。「お酒」については、郊外型ショッピングセンターはクルマで来ることが前提なので、お酒を中心とした商業が回せない。それが回せるのは既存の公共交通機関の発展している中心市街地です。

木造建築の商業施設が建て込んでいるエリアは防災の観点からは危険だからといって、全部壊して大型の鉄筋コンクリートを建てるのは、旧来型の都市開発ですが、それだと中心市街地の魅力は薄れてしまいます。先ほども言いましたが、いわゆる赤提灯は開発ではつくれません。自然発生的にできたものを、再びつくろうとしてもできない。積極的に保持しなければ消滅します。たとえば、防災優先の論理には対



抗できないでしょう。だからこそ問われるのがエリアマネジメントであり、本来の意味でのまちづくりです。新宿のゴールデン街は、ハードウェアとしては木造長屋建てという防災的に解決できない問題を抱えています。そこで商業組合の人たちはソフトウェアとしてどう解決するかを考え、入居しているすべての店の店長が防火責任者の資格を取り、防災対策をすることで維持しようとしています。

木下——防災力を高めることで町から人がいなくなってしまったは、もともともありません。阪神淡路の新長田地区の再開発は典型的なそのパターンです。新長田地区はもともと大正筋という伝統的な商店街で、木造2階建ての自宅兼店舗で生活をしている人が多くいました。だからこそ、火災によって震災の被害が大きくなってしまいました。このためその後の復興事業で建てられた再開発ビルは、鉄筋コンクリート造の立派なもので、なおかつ巨大なものになりました。耐火建築を進め、火災に強いまちづくりを進めるためです。しかし、その結果として、もともと地元で商売をしていた人たちは、店舗と自宅が切り離されてコストが二重にかかる生活となり、さらに鉄筋コンクリート造のため固定資産税が高くなり、さらに開発までにかかった数年の時間のなかで、商売をやめたり、地元を離れざるを得ない状況となった。結果として今、新長田は立派なビルの低層階が空き店舗ばかりになってしまいました。何のための、誰のための復興事業かわからなくなってしまいました。東日本大震災においても同様に、復興事業といって画一的な道路、オフ

イス、商業施設などを整備していく計画が立ち上げられ、しかも数年の時間が費やされていくことで、人口流出が拡大し、土地や建物を用意できた時には、使う人がいなくなってしまったという地域も出てきています。

まだまだ、地域の活性化などではハードで戦おうという意識がいまだに強くあるんですね。しかし今、面白い飲食店を経営しているオーナーは、ピカピカの再開発されたビルには入りたがりません。正直、そういう施設自体が時代遅れでダサイからです。商業エリ

深夜の公共交通の運行は、ナイトライフエコノミーの前提

木曽——行政がやるべきことと、手を出してはいけないことのすみわけが明確にあって、ナイトタイムエコノミーの振興という文脈だと、公共交通については行政にしかできない分野です。この議論は、常に「需要がないから公共交通を通せないし、公共交通がないからナイトタイムエコノミーが生まれない」という、ニワトリが先か卵が先かという話になってしまいがちです。しかし、短期的な利益だけを見なくてもいいのが行政です。エリアを決めて公共交通を通せば、そこが起点となって経済のサイクルが回り出すはず。一方で、ナイトタイムエコノミーのコンテンツ、商業の内容そのものに対して、行政は踏み込むべきではないというのが私の考えです。先ほど話題に出たB級グルメは、本来は商業者が自分たちの創意工夫でやるべきもので、行政が主体となって補助金を入れるというものではないと私も思います。

木下——民間がやるならいいんです

アの活性化は、いかにセンスのある事業者に入ってもらうかが大切で、そのようなセンスある人たちにダサイと思われるのではなく、「あそこら辺で店をやりたいよね」と思っていたかかないといけな。その意味で、日本の地域は、古くて小さいものを破壊して、新しくて大きい施設をつくればつくるほど衰退してきてしまっている。むしろ中心市街地に残る自然発生的にできた飲み屋街や、入り組んだ路地をいかに魅力的に保てるか、まさに試されていると思います。

よ、人気がなくなればやめればいいわけですから。行政がやると人気がなくなっても税金を費やし続けて問題を取りつこうようなことになってしまいます。民間が投資していることと、行政が投資するところがうまく噛み合っていないんですね。今、面白くなっている町というのは、面白い民間人が集まって、投資してビジネスが成立している地域です。行政としてはその面白い人たちに、計画を立てたうえでやってもらうのではなく、民間がやっていることを計画的に取り込むというプロセスが必要です。それができた地域はすごく強い。つまらない駅前広場をつくるくらいなら、民間の面白い人たちがやっているビジネスの後押しをする方がよほどいいと思います。

木曽——駅前ロータリー、あれどうにからないですかね。駅前の一等地をロータリーにするというのは商業感覚としてはあり得ません。

木下——しかも、ロータリーがどんどん巨大化していますよね。それは考え

られてやっているというよりは、「駅前はそういうものだ」という価値観のもとになっている。バスやタクシーなどの事業者の力もあるし、からだの不自由な方への配慮もあるでしょう。しかし、そういう人をアシストする機能を付けてでも、駅前の一等地は稼げる場所にして、民間に投資してもらって固定資産税や所得税、住民税を納めてもらい、サービスを改善していく財源を確保していくという方向に行くべきだと思います。

木曽——ナイトタイムエコノミーの振興という一点だけを見た場合、猪瀬直樹さんが都知事を辞任しなければならなかったのは大きな損失です。猪瀬さんが都知事就任後に明確にナイトタイムエコノミーの振興を掲げ、またその一番のキーファクターとして公共交通の整備、深夜交通の整備を挙げたことは、方向性としては正しかったと思います。

ロンドンの地下鉄は24時間化を始めていますが、この地下鉄の整備は、2012年のロンドンオリンピックのための周辺事業として予算を獲得しました。オリンピックを錦の御旗にして予算をとって、その先を見据えた開発をするのは、行政の知恵です。そういった知恵が今の日本にないのはとても悲しいことです。

木下——うちはオフィスが大崎ですが、終電近くなると、大崎止まりの山手線から降りてくる人はたくさんいますよ。大崎からはタクシーで帰る人もいれば、深夜営業のラーメン屋に向かう人もいます。バスがあれば最寄りの駅まではそれに乗っていただけますから、6000円かかっていたタクシー代

が2000円で済むかもしれません。それは多くの人にとってありがたいことだし、その分が違う消費に回る可能性もありますよね。何より終電を気にしてピクピクしなくてもよくなりますから、そこにも消費機会が生まれそうです。

木曽——終電があるため夜の商売が回らないんです。日本の商業施設の不動産運用はすごく非効率的で、使ってい

「人が集まって楽しむこと」を肯定するメッセージが必要

木曽——日本ではライブエンターテインメントやショービジネスは、なかなか成立しません。その最大の理由も終電が早いことです。平日の夜のショーが成り立たない。要するにお客さんを集められる時間に公演できないのです。仕事帰りに観劇しようと思ったら、前もって仕事を調整して残業にならないようにして、定時に退社して急いで駆けつけるしかありません。食事もしない状態で、終わったら夜8時くらいになりますから、終電を考えればそのまま帰ることになります。とんでもない経済損失だし、そんな状況で日本のショービジネスが成立するわけがないのです。結果的に日本のショービジネスのファン層は時間に余裕がある主婦が多くなり、その層に最適化するために昼公演が中心になっています。そこしか狙っていないわけですから、広がりませんよね。

最近の施策にプレミアムフライデーがありますが、そこに合わせた特別なキャンペーンが出てこないのも不思議です。たとえば、プロ野球はプレミアムフライデーの日に「野球を1回オモテから観よう！」とキャンペーンを打

ない時間帯のほうが長いんですよ。賃貸で入っているテナントは、家賃を払って24時間借りる権利がありますが、実際の営業は1日のうちの5時間くらいしかまわってない。それを1分1秒でも長く営業できるようにすれば、経済活性化につながります。そのインフラとして欠かせないのが、公共交通なんです。

てば、きっと盛り上がるはずなのに、何もしていない。もったいない話です。木下——観光客を対象としたキャンペーンがあってもいいですよ。何日か滞在していたら「1回くらい夜やっているショーを観に行こうか」ってなるはず。日本の飲食店は閉店が早いので、夜の食事のコースもゆっくり食べられない。ヨーロッパだと9時から食事を始めて、12時半くらいまで食べているのは普通です。そういう感覚で来ている外国の観光客からしたら10時でラストオーダーと言われてしまうと、びっくりしますよね。

木曽——せっかく消費機会があるのに、損失しているという現状を解決するためには、行政が「ナイトタイムエコノミーの振興が必要である」というメッセージを出すことが重要だと思います。最初の議論に戻るのですが、夜の業界の人たちは、町から分断されて生きてきていますから、自分たちが必要とされているとは思っていないので、まず政治の立場から「必要である」と伝えることは意味があります。さらに、昼の商業者もそれを共有できます。お互いが参加・交流をするきっかけを



木下斉

きのした・ひとしー1982年東京生まれ。一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンス代表理事、内閣官房地域活性化伝道師、熊本城東マネジメント株式会社代表取締役、一般社団法人公民連携事業機構理事。専門は経営を軸に置いた中心市街地活性化、社会起業など。著書に『地方創生大全』（東洋経済新報社、2016）、『まちで闘う方法論、自己成長なくして地域再生なし』（学芸出版、2016）他。

つくるのが、最初にできる取り組みです。

ただ、国はすでに動き始めています。ナイトタイムエコノミーの振興議員連盟ができましたし、官公庁でもそれらを検討する有識者会議を始めています。国はもうすでに「ナイトタイムエコノミーとは日本の経済や商業を担う一つの大切な分野である」というメッセージを出しているの、同じように地方行政もまずはメッセージを発して欲しいです。

木下——そうですね。お酒をみんなで楽しく飲むことも、パブリックな場でやってはいけないという雰囲気が日本にはまだ色濃くあります。だからこそ、行政のアナウンスメント効果というのは重要だと私も思います。人が集まって多少のお酒を飲みながら、楽しんだり消費したりすることは、すごく大切なことだと認められるだけで、いろいろなことがやりやすくなるわけです。道路にはみだしでテーブルを置くことも、15年前はカフェでさえできませんでした。ようやく最近は、お酒

副作用への投資を支払えるビジネスモデルをつくる

木曾——ナイトタイムエコノミーは、一方で必ず市民の不安が存在する産業分野で、それを前提に振興を語らない限り、どこかで失敗します。商業的にすごく盛り上がって、儲かって、人がいっぱい集まっても、周辺住民からの反対運動が起こると、行政はもう止められません。行政は基本的に商業者よりも住民のほうを向きますから、いったんそういうムーブメントが起こると、瞬時にその盛り上がりを押しとどめる方向に社会は動きます。

でもいいという話になってきました。都市公園法も大きく改正され、公園にさまざまな施設を入れることができるようになりました。だったら公園のテナントも、場所によっては夜間営業をするお店を入れたほうがいいのではないかという発想も生まれます。繁華街にある暗くて怖い地区公園に、明るいオープンなバーがあってもいんじゃないでしょうか。ロケーションで公園ももっと多様な形態になれば、可能性は広がるわけです。なのに、どこの公園も一緒、公共のものは酒はけしからんとなってしまって、昼も夜もカバーしながら経済振興にも寄与する使い方をしようというような意見は出てきません。より開放的になっていくことが大切です。まちづくりの分野には禁欲的な人が多いので、人が楽しく過ごすということが認められることが必要です。今後、観光業やサービス業を成立させていくためには、楽しむことがビジネスになるということをすんなりと受け入れられるマインドセットが重要だと思いますね。

ナイトタイムエコノミーの振興を考える時は、行政側にいる人たちは、反対運動などが起こらないようにマネジメントする必要があります。ナイトタイムエコノミーを産業として盛り上げていくというメッセージと共に、行政が周辺住民の安心・安全を守るというスタンスを見せていくことも重要でしょう。

ナイトタイムエコノミーの課題は、騒音、ゴミ、酔っ払いの三つです。「酔っ払いがうちの庭先に入ってきた」と

いう小さなところから、地域の有力者が反対運動を始めた瞬間に、ナイトタイムエコノミーの振興は一気に揺り戻されます。

木下——私は熊本で事業系ゴミ処理を、一括契約で特定の事業者さんに委託する事業をやっています。170店舗くらいが加盟しているんですが、各々が勝手に出していた事業系ゴミ処理を特定の事業者さんに委託したんです。それまではバラバラの業者に依頼していて、ゴミの識別もできておらず、ゴミの山ができていたような状況でした。最初は、決まった時間までにきちんと事業系ゴミのシールを貼って出すということ始めて、徐々にルールができていきました。ゴミ回収の事業者さんも、一軒ずつ営業しなくていいし、合理的な回収ルートが組めるので、全体的にコストも下がり利益の出る事業になります。町全体で新しい伸び代をつくりつつ、自分たちでできることは経営合理化し、投資するのに必要な資金を合理化した資金から生み出せる余地はまだまだあるんですよ。

ナイトタイムエコノミーでは、副作用を前提とした投資をきちんとしなければいけない。でもその投資はちゃんと返ってくるので、不動産事業者側とテナントに入る事業者側で総合的に組み立て、マイナスの効果を吸収するコストを支払えるようなビジネスモデルをつくるのが可能でしょう。さらに、警察行政とも連携することも必要です。おそらく今後は、夜の経済の発展に多くの町がトライしていくでしょうから、その手法もより高度化していくのではないかと期待しています。



photo essay 夜のざわめき

坂本政十賜



渋谷区渋谷



大阪市北区曽根崎（左右共）



千代田区有楽町



千代田区有楽町



渋谷区神宮前



渋谷区渋谷



千代田区丸の内

夕方からの「自分の時間」

時間主権を取り戻せ

幸福な働き方の鍵は、一人ひとりが日常の仕事のなかで創造性を発揮し、そこに非物質的な満足を見出すことである。それは、端的に時間主権を回復することだ。仕事に創造性を追求し、なおかつ転職力を身につけるために主体的に行動すること。幸福な労働は、この二重の主体性によって実現する。

一方、家族に目を転じれば、「男性は仕事、女性は家庭」という近代以降にかたちづくられた性別分業体制を脱し、「共働き社会」に移行しつつあることがわかる。しかし、日本の共働き社会では、結婚しない（できない）人の増加、子どもをつくる人の減少といった、「家族からの撤退」が生じていることも事実だ。

ナイトタイムエコノミーの振興には、個の自立と時間主権の確立が必須であるし、何より、そうした独立した主体によって築かれる「家族」という基盤が必要だ。生活を充足させる家族という容器。家族ベースのナイトタイムエコノミー活性化の要件を探る。

photo:坂本政十賜

大内伸哉

神戸大学大学院法学研究科教授

筒井淳也

立命館大学産業社会学部教授

「幸福」な働き方とは

大内——今回の特集のテーマは「ナイトタイムエコノミー」だそうですね。夜の経済を活性化しようということなのではないでしょうか？ 出端を挫くようですが、じつはピンときていません。私はイタリアに暮らしていた経験がありますが、ヨーロッパでは確かに、レストランにしても夜の営業開始時間が遅く、20時、21時ということは当たり前です。しかし夜に外食ができるのは都市部だけですし、そもそも日本に比べて都市の規模も小さい。フランス・パ

リ、イギリス・ロンドンくらいであれば、ある程度は夜にも賑わっているのだと思いますが、それでも東京や大阪とそれほど変わらないのではないですか。筒井——私が調査で訪れているアメリカでも、夜は特別遊びに行かず、家に帰っているという印象があります。ただ、日本のナイトタイムエコノミーの場合は「会社帰りに飲みに行く」といった画一化された消費しかない、ということはあると思います。そしてこれはおそらく私たちの対談テーマである「働き方改革」「時間主権」ということ

と関連してくるのでしょう。

大内——では働き方に関する一般的な議論として、確かに、多くの日本人の働き方には問題があると考えています。私は労働法を専門としていますが、労働を扱う研究者の目的は労働者が幸せになることです。できるだけ幸福になって欲しい、そのための研究であり、法律です。もちろん、何が幸福かは人それぞれです。憲法にも「幸福追求権」はありますが「幸福権」はありません。自らが幸福だと思うことを追求する権利は誰にでもある、ということです。この幸福という視点から考えた時に、日本人の働き方は果たして幸福なのだろうか。そこには大いに疑問があります。しかし現実には、働いてお金を稼ぎ、生きていかざるを得ず、仕事からは逃げられない。ではどうやって、逃げられない仕事と幸福とを両立していくことができるのか。それがまず、抽象的な問題としてあります。

働き方にもいろいろあります。最も極端なのは産業革命以降に出てきた、単に機械のオペレータとしての単純労働です。要するに、自分の時間を雇用主の指揮命令下に委ねる。そこには基本的に、自分の裁量や創造性を発揮する余地はない。これが「雇用」というものの原点です。もちろん雇用であっても、自分で仕事のプロセスを決定できるなど、裁量の余地がある場合もあります。前者が「ディペンデント（依存的）」だとすると、後者は比較的「インディペンデント（独立的）」な働き方といえますが、いずれにしても「雇用労働」であるという意味では労働法の対象になります。ではなぜ労働法があるのかといえば、雇用労働は他人の指

揮命令下で働くという点で、社会的な保護の必要性がある働き方だと考えられているからです。

そこで先に述べた幸福について考えると、やはり人間である以上は、労働のなかにもなんらかの「自分らしさ」のようなものが表現できることが必要なのではないか。だとすれば、できるだけインディペンデントな働き方を目指した方がいいのではないか。これをとことん追求していくと自営業となつて、もはや雇用労働ではなくなっていくのですが、現実には日本では働く人の約9割が雇用労働です。このようなディペンデントな働き方が多いという状況が、今の日本の、いろんな閉塞的状況につながっているように思える。まずはその辺りが、働き方に対する私の問題意識です。

筒井——「働く」ということについて社会学の立場からお話すると、社会学という学問には、お金を稼ぐことに対する、そこはかたないネガティブな感情があります。つまり、ボランティアのような無償労働とお金を稼ぐ有償労働ではボランティアの方が崇高でいいものだという前提を、社会学者はゆるやかに抱いているのです。ただ、私自身はそのことに違和感があつて、もう少しバランスの良い見方が必要だと考えています。お金を稼ぐということは一種の取り引きです。それが強制されない、対等な取り引きであれば、賃金としてのお金を払う方も受け取る方も両者が幸せになっているはずです。

しかし、大内先生も著書の中で指摘されていますが、雇用というのはどうしても、対等な取り引きになりにくい性質をもっているようです。私も以前、

仕事の自律性指標についてデータ分析をしたことがあるのですが、日本の仕事における自律性のなさは、世界的に見ても際立っていました。要するに、仕事に自由がないのです。たとえば、日本の企業では仕事に自分の私用メールを見ない、ましてや打たないということはおそらく前かもしれません。しかしそんなことは海外ではまずあり得ません。あるいは仕事に「ちょっと銀行に行ってくる」などと言って、1時間くらい私用で抜けてもさほど問題になりません。みんな「どうぞ、どうぞ」という感じです。自分の仕事ちゃんと終わればそれでいいという考え方をもっている。その辺りが日本とは決定的に異なり、それが労働すること、働くことを「苦役」にしている要因の一つだと思います。

大内——筒井先生が指摘された日本の働き方に個人の自律性がないこと、あるいは仕事上の裁量の余地が極めて低いことは、私の先に述べたことからすると、幸福な働き方の対極になると思います。ただし、インディペンデントな働き方を追求して自営業になれば、自分の時間を自分のやり方で決められる反面、仕事がなくなったら失業保険もないなど、いろんなリスクを負うことになる。雇用というのは、ある意味、守られているがゆえにある程度の犠牲も払う。そこでバランスをとっているという面がある。このどちらに幸せを感じるかは、結局、個人の選択になるわけです。

しかし、これまではそういうこともできましたが、その前提が崩れつつあります。終身雇用は今や幻想です。賃金制度も、これまでの年功的な運用が



大内伸哉

おおうち・しんや—1963年兵庫県神戸市生まれ。神戸大学大学院法学研究科教授。専門は、法学、労働法。著書に、『AI時代の働き方と法2035年の労働法を考える』（弘文堂、2017）、『勤勉は美德か？ 幸福に働き、生きるヒント』（光文社新書、2016）、『君の働き方に未来はあるか？ 労働法の限界と、これからの雇用社会』（光文社新書、2014）他。

ら、だんだんと成果主義的な要素が入ってきています。そもそも、終身雇用制や年功賃金制があるのは世界でも日本だけです。年功的な賃金カーブはどの国にもある程度は存在していますが、日本のように定年までの長期雇用を守り、その間も安定的な賃金を保障するという慣行がある国は、私は、日本以外知りません。ただ、このグローバル化の時代のなかで、日本だけがこの仕組みをずっと維持していくと考えることは現実的ではないでしょう。今後は雇用や賃金はより不安定なものとなっていく、そうすると雇用されるということの持つメリットはだんだんと失われていくのではないかと思います。

そうだとするならば、やはり自営でやっていくという方向を目指すべきではないのでしょうか。そこにはリスクもあるけれども、いかにして自分らしさを追求しながら仕事をし、お金を稼ぐことができるかを考えることが、必要になっているのだと思います。ただ、個人で抱えきれないほどのリスクもあるので、そこは政策的なサポートが整備されていく必要があります。

筒井——私がずっと不思議に思っていたのは、とくに日本では、仕事と幸福ということをあまり結びつけていない風潮があることです。少なくとも社会に出てからの長い人生のなかで仕事が占める割合というのは非常に大きくて、その仕事が上手くいっている／いないということとは、その人の幸福度にとって本当に大きい要素のはずです。ところが幸福という要素のなかに仕事はほとんど入ってこない。つまり仕事というものは元来「不幸」なも

のだと思っているのではないのでしょうか。ですが大内先生が指摘するように、仕事が雇用で守られていないとすれば、仕事も家庭も、自分である程度リスクコントロールをせざるを得なくなります。おそらくその両方について、幸福というものをバランスよく追求していくという、多少難しい局面に入っていくのだらうと思います。

時間主権を取り戻せ

筒井——ただ、じつはこれはなかなか難しい問題です。たとえば、アメリカの家族における働き方の調査をしてみると、彼らは常に、ものすごく忙しいんです。夫婦共働きで、仕事も家庭も忙しい。かつては仕事が多少キツくても、家に帰ればリラックスできるという関係があったはずですが、最近はどうも逆転していて、家にいる時には常に時計を見て、何時に子どもを風呂に入れて寝かしつけるか、何時に食事して何時に寝るかなど、ドメスティックワークの管理をいつ、誰がやるのか、家族がシビアに考えてめまぐるしく行動しなければならない。ところが会社に行けば、ある程度は自分の裁量で働くことができるのでホッとするというのです。もちろん相対的に見て会社の方が家庭よりも余裕があるというだけで、仕事そのものは忙しいんですよ。大内——面白いですね。

筒井——すべての人がそうだとは言いませんが、たとえばGoogleなどが象徴的です。Googleでは優れた人材を獲得するために職場の居心地をよくしているわけです。職場の居心地がよければ、夫婦とも家に帰りたいがらないかもしれない。しかしそういうわけには

いかないのが帰るのですが、帰れば帰ったもののすごく忙しい。彼らは、家庭と仕事、両立させようと頑張っているわけですが、無理が生じてしまっているのです。私はその意味で、これはミスマネジメントの現れだと思っています。

そして、もしもこういう状況が日本でも進んできたら、アメリカよりも酷い状況になるでしょう。そもそも共働き化が進むと夫婦共にプライベートな時間は減少し、当然、家庭のマネジメントに注ぎ込む時間も減少します。すると、どっちがやるんだということでコンフリクトが生じる。社会の構造が共働き化に適していないため、男性の働き方は変わらず、女性が専業主婦として家庭にいることを前提とした働き方のまま、そのうえで、さらに女性も社会進出をして活躍をするようになってしまったら、間違いなくみんな疲弊するはずです。

大内——なるほど。ただ労働法的には、Googleのような例は望ましいパターンであるともいえます。労働者の福利が法規制を使わないで改善していくのは、それ自体は非常に望ましいことです。今は日本も人手不足ですから各社が競争して快適な職場づくりをし、優秀な人材の取り合いをするようになれば、じつは労働法も要らなくなるのですが。

筒井——Googleの場合は社員食堂も無料で豪華なビュッフェが用意されていたり、デスクもコンパートメントで自分の好きなように雑貨やインテリアを飾っている。なかにはペットを連れて来ている人もいる、といった具合ですが、そこには個人の裁量を発揮する

余地があることは間違いありません。だからこそ、たとえ仕事が忙しくても、むしろ会社に行くとホッとするのでしょうが、日本の企業ではそうはいきません。

大内——アメリカでももしかすると、職場が快適すぎて家庭の時間がなくなってしまうということが今後は問題になって、揺り戻しがあるかもしれませんね。アメリカはそもそも労働規制が非常に弱い国なので、日本とは違ったメカニズムで、ワークライフバランスのあり方が問われているのでしょう。筒井——そのワークライフバランスを、日本の共働き家族がどこでとっていくのかといえば、やはり、仕事に余裕をもたせるしかないと思うんです。

私は、日本の長時間労働や時間主権のない働き方が強いられる根本には、日本が消費者天国であるという要因があると思います。日本では、消費者という立場にいればすごく気持ちよく過ごせる。ところが海外、とくにヨーロッパに行くとき消費者としてはとても不便です。日曜日に空いている店は少ないですし、宅配便だってなかなか届きません。しかし逆に考えると、やはり働き手側には多少余裕があるのです。ですから日本も、そちらに舵を切るという手があるのではないのでしょうか。それをしないまま、仕事も家庭も、となると、どこにも余裕がなくてキチキチになってしまう。そうすると全体的に不幸になっていきます。

大内——確かに、消費者vs労働者という話は、海外に行ったことのある人ならだいたい問題意識をもつと思います。ドイツの閉店法が典型ですが、ヨーロッパの国であれば、この時間にな

ったらシャッターを閉めなければならないということが決められています。イタリアにも、私を知る限り24時間営業しているコンビニエンスストアなどありません。要するに働く人の論理が圧倒的に強いのです。もちろん、なんでもかんでもヨーロッパがいいという議論には与しません。ただ、日本とヨーロッパ、どちらが人間的かといえ、やはりヨーロッパのほうだと思わざるを得ない。多くの場合、一人の間は消費者であると同時に労働者です。日本は消費者天国ですが、その内実を見てみると、自分が労働者の時の過酷な苦役が標準となってしまう、消費者になった時には他の労働者に苦役を強いてしまうといったような、負の連鎖があるような気がするのです。

総合的に考えれば、労働者の論理をもう少し強めていったほうが、結局は自分たちの幸福につながるはずです。労働者の論理があまり強くなるのも問題ですが、現状では間違いなく消費者の論理が強すぎるので、もう少し強めに労働者の論理を掲げた方がいいでしょう。

筒井——ただ、そこには根強い固定観念というのか、なかなか変えられない意識のようなものも存在しているようです。これは以前、ワークライフバランスを考えるという、自治体の講演会に参加した時の話ですが、この時、ある飲食店の女性経営者が「わが社のワークライフバランスは完璧です」と。その秘訣は何かというところ「商品力が高いこと」だとおっしゃったんです。つまり、商品力が高いために営業や宣伝をしなくてもお客さんがたくさんつく。そしてすぐに売り切れてしまうの

で、残った時間は余暇に使える、というわけです。ところが、こういう話を聞くと、我々日本人はまずちょっと疑うんです。普通は何かを犠牲にしないとワークライフバランスなんか取れないんじゃないの、と。たとえば、利益を犠牲にするから時間に余裕ができるんじゃないか、という発想になってしまふ。

大内——要するに「少ない時間でたくさん稼げるはずがない」という先入観があるわけですね。労働というのは時間をかけて、汗水流してこそ対価が支払われるものだ、と。それはやはり、労働は苦役という発想です。能力がある人がサッと仕事を片付けて、それと同じくらい報酬もらっているとなると、不公平感を抱いてしまう。どこかに時間が金を生むという感覚が染み込んでいて、これがダラダラ残業など長時間労働問題につながっているんですよね。

私は常々、労働者は時間主権を取り戻せ、と主張しています。人生の限られた有限の時間のなかで、自分の意思も投影できない、創造性も発揮できない、自分らしささえ自分でコントロールできないような仕事のための時間が人生の多くを占めるような状態はやはり不幸ですよ。少なくとも、そういう問題意識をもつべきです。しかも、より短い時間でより良い結果が出せる労働者の方が、雇用する側にとってもメリットになることは間違いない。ところが雇用主にも労働者にも、時間と労力を注いでこそその仕事だという意識が根付いているんですね。

筒井——おっしゃる通りで、むしろ「効率性」という言葉自体をネガティブに

使う人もいるくらいです。効率化が人間の不幸を生む、とか。そんなはずはないだろうと思うのですが、汗水垂らして、時間をかけてこそその仕事だろうという意識は、どこか根強くあると思わざるを得ません。

大内——たとえば「^{サブロク}三六協定」(労働基準法36条に基づく労使協定。企業側が法定労働時間を超えて労働を命じる場合、労働組合などと協定を結び、労働基準監督署に届け出なければならない)にしても、形骸化しているとはいえ、これを労働者が本気で活用しようと思えばいくらでも長時間労働を抑制できます。労働者たちが、ノー残業でいきたいので協定は結ばないとか、あるいは協定は結ぶけど、月間で10時間までに抑えるといった主張をしていくことはできるのです。ところが現実にはそれをやらない。もう一つ、年次有給休暇の権利についても同じようなことが言えます。日本では労働者が自ら休む日を指定して休暇を取るという仕組みになっていますが、日本人の年休取得率は5割を切っています。要するに、労働者であっても、自分が主体性をもって意識的に長時間労働をやめようとすれば、いくらでも法律は用意されているのですが、それがあまり使われていない。それはなぜなのか、ということですよ。

いくら法や制度で権利を与えていても、権利というものはそれをもつ者が行使しなければ意味がない。現状では権利を行使するというのではなくて、政府の手で、企業側に働きかけてほしいという受け身の形になっています。要するに労働者側が権利を放棄している状況なのです。

高度経済成長の弊害

筒井——そういった現状を踏まえ、「裁量労働制」についてお考えをうかがいたいのですが、仮に、日本的な働き方そのままで裁量労働制の適用範囲を広げていくと、おそらく、家に持ち帰って仕事をせざるを得ないなど、結局は単に労働時間が伸びるだけだという気がします。裁量労働制が本来的に自律的な働き方として機能する条件のようなものがあるのではないのでしょうか。

大内——労働基準法上の裁量労働制は要件が非常に厳格で、ほとんど使われていないのが現実です。基本的には、自分の仕事を進めるうえで裁量があるということが要件で、そこには、自分の裁量で仕事を進められるのに、たくさん働いたから割増賃金をもらうのはおかしい、という論理が根本にある。ただ、仕事の内容にも裁量労働制を適用するのに適したものとそうでないものとがあって、後者にこの制度を間違って適用してしまうと長時間労働になりかねません。

ただ私は、長時間労働がすべて悪いとは思っていません。いい長時間労働と悪い長時間労働がある。たとえば、ノーベル賞を受賞する発明をされるような人は、毎日ではないにしても、おそらく徹夜を重ねながら、凄まじく働いている可能性がある。その人に対して、1日8時間しか働いてはいけませんというのはナンセンスです。これはホワイトカラーエクゼンブションの議論にもなってきますが、自分の仕事を自分でコントロールできる立場にあれば、そこには時間主権が働いていますから、労働基準法などの法律が余計なことを言うべきではない。

もちろん、そうではない人もかなりいることは確かです。典型的な雇用の働き方で拘束的な状態で働いている人の場合にはまったく逆なので、そこに裁量労働制を持ち込むべきではないでしょう。ただ、そういう人だけを念頭において、ホワイトカラーエクゼンブションはダメだといった評価はすべきではないのです。

筒井——ホワイトカラーエクゼンブションの議論に対する反応は、メディアも含めてなかなか神経質ですね。政治家の言うことを信用していないという側面もあるかもしれませんが、単に残業代を支払いたくないだけではないのかなど、何か、我々を不幸にする制度ではないのかという見方が一般にはあるようです。

大内——今言ったように、ある働き方をする労働者にとってはエクゼンブションが必要だということは専門家の間ではそれほど異論がないのですが、そこがなかなか国民に伝わらないのが歯がゆいところです。同様の議論は、解雇における金銭解決に関してもあります。そんな制度を導入したら濫用する企業が続出して日本中失業者だらけになると言う批判もある。しかし、それはあまりに極端です。企業だって必要な人材を解雇するはずはありません。少しでも規制を緩めると何かひどいことが起きるのではないかと感情的になってしまい、合理的で冷静な議論ができていません。

筒井——日本社会の構造として、仕組みを変えることについてはかなりの抵抗感がありますよね。どうも、1980年代、日本の企業が国際的にもかなり強かった時代の仕組みを変える必要は

ないという雰囲気があるようです。

大内——結局日本は、まだ高度経済成長期の成功体験に酔っているのでしょうか。しかし、あれは幻です。幻であって成功ではなかったかもしれない。だからこそその後、副作用が顕在化したのではないのでしょうか。

筒井——家族社会学的な視点からも、1980年代は鍵になります。80年代、日本の経済は相対的に見て確かに強かった。1970年代にオイルショックがあり、各国の国内経済に安定成長をもたらしたブレトン・ウッズ体制も終わり、急速にグローバル化が進むなかでアメリカやヨーロッパではものすごい数の失業者が生まれて、経済的に非常にまずい状態になりました。それに比べると、なぜか日本は調子がよかった。

ではその理由は何かということ、企業による安定雇用とそれを可能にする専業主婦のサポートだという話になって、日本のこの仕組みこそが最高だということになったわけです。

しかし、今や共働き家族が増えて、専業主婦のサポートが期待できない、安定雇用も保証されていないにもかかわらず、働き方だけが変わっていない。欧米では80年代、90年代を通じて共働き社会に一生懸命変えていて、制度もそれに合わせてつくり変えていきました。ところが日本は80年代の成功体験があまりに輝かしかったので、それを変えようとは誰も思わなかったんですね。ですが80年代の栄光は、今や見る影もありません。ヨーロッパ各国を旅行していろんなホテルを回っても、置いてあるのはすべて韓国製のテレビです。日本製など一つもなかった。また日本は現在、アジアで最も豊かな



筒井淳也

つつい・じゅんや—1970年福岡県生まれ。立命館大学産業社会学部教授。専門は、家族社会学。著書に、『結婚と家族のこれから 共働き社会の限界』（光文社新書、2016）、『仕事と家族 日本はなぜ働きづらく、生みにくいのか』（中公新書、2015）、『日本の雇用と中高年』（ちくま新書、2014）、『若者と労働「入社」の仕組みから解きほぐす』（中公新書クラレ、2014）他。

国ではありません。シンガポールの平均所得は日本の約1.5倍です。しかし80年代に成功体験をした人たちはその現実を受け止められない。それは家族モデルにしてもそうです。そんなこともあって、共働き社会化が止まっているということもあります。

大内——今、共働き家族は実数として本当に増えているんですか。

筒井——増えているのですが、増え方はゆっくりです。これは日本の特徴だと思うのですが、変わっているけれどゆっくりしか変わらない。つまり、痛みがあまり見えてこないんです。

大内——最近の学生は、女性もみんな、共働きは当たり前だと思っているようです。

筒井——そうなのですが、同じ共働きでも、その意識は95年前後から変わってきています。それ以前の女性は自分のスキルを生かして仕事を続けたいという積極的な意志をもっていたのですが、最近では専業主婦になりたくても、経済的に無理だから働かざるを得ない、という感じです。男子学生にしても同じで「将来結婚して、奥さんが仕事を辞めると言ったらどうする?」と聞くと「続けて欲しい。経済的に不安だ」と答えます。二人で稼がなければ生活が維持できないという認識です。

大内——ましてや子どもをもつにもお金がかかるし、それは贅沢なことだ、と。

筒井——その通りです。結婚にしろ、出産にしろ「本当に大丈夫か?」「万全の備えはあるか?」と相当に覚悟を決めてからでなければ実行できない。これを私は「家族主義」と言っているのですが、現在の日本には、家族をもつからには責任をもって、一生面倒をみ

て安泰でなければならないという雰囲気蔓延しています。さらに「苦労してこそ家族」という意識も強い。

大内——まさに労働と同じじゃないですか。

筒井——同じなんです。たとえば、出産時の無痛分娩に対しても否定的な見方が強く、痛みを伴ってこそ愛情をもって子育てできる、という考え方は根強い。苦労して汗水流さなければ幸せになれない、というやつですね。アメリカやヨーロッパの場合はその辺りは案外気楽に考えていて、そもそも婚姻関係を結ばないままカップルとして子育てをしている人も珍しくはありません。ですから、個々が自立すれば、こういった雰囲気も緩和されるのかもしれませんが、日本の場合は年々、意識が保守化しているように感じます。

昼でも夜でも、自分らしく時間を使う

筒井——話をナイトタイムエコノミーに引きつけると、日本にはまだ多い家族主義的な意識が強い人々は、夜に子どもを置いて遊びに行くことなど、まずあり得ません。ただ他方、アメリカやヨーロッパの外食産業が子どもに優しいかという点とまったくそうではなくて、入店そのものを断る店も多い。夜

の町は大人の空間だ、というわけです。それに比べると日本では子どもがいるからと言って入店できない店は少ないので、実際には夜でも案外出歩きやすい国ではないでしょうか。

大内——家族連れで遅い時間まで居酒屋にいたりすると、多少、眉をひそめる傾向はありますが、日本の場合にはファミリーレストランもありますから、結構夜でも外に出ています。まあ、それで子どもが楽しい思いをしているかどうかはわかりませんが。

筒井——確かに、子どもがぐずると大変ですから、大人も子どもも、楽しめるのかどうかは疑問です。アメリカ人ならベビーシッターに預けていくのですが、日本にはそういう文化がありませんし。

大内——そもそも日本ほど夜に女性が出歩きやすい国はないんじゃないですか? 女性が一人で食事をしてワインバーで飲むということも珍しくはない。おそらくイタリアだったらあり得ませんよ。夜に女性が一人でお酒を飲んでいたら、それは絶対に男性に声をかけられます。男性側はむしろ、声をかけられるのを待っていると考えているし、もっといえば、そういう商売をしている女性だと思っている。そういう意味

では日本の、とくに都市部は、女性が自由に振る舞えるという点で、世界にも類がない環境があると思います。

筒井——海外に比べてカップル形成のプレッシャーも弱いので、一人でも楽しく過ごしてしまうんですね。一人で仕事して、そこそこ稼いで、自分のお金で好きなように楽しめる。ところが、女性は、結婚した途端に極めて不自由になるんです。社会学の調査結果にも出ていますが、結婚した途端から、大抵はみんなが徐々に不幸になっていく。その不幸になる度合いが、女性の方がいくらか高いんです。その一番の要因が友だちと自由に会えなくなるのですが、ましてや子どもができて仕事を休職する、あるいは辞めるということになると、また大きくライフスタイルが変わってしまいます。男性の場合は相変わらず仕事をしていて、職場の人間関係も続いているし、仕事帰りに友だちに会って一杯飲んで帰ることもできる。そう考えると、とくに女性側には、結婚して幸せになれるという期待が抱きにくくなるのもあたりまえでしょう。ですから今回の対談に向けて最初に思ったことは、家族という視点から「ナイトタイムエコノミー」を考えるとすれば、女性が結婚しても、夜に友だちと遊んだり、楽しみを得られる仕組みを考えることができれば、夜の経済をより活気づけられるかな、ということだったんです。

大内——冒頭の話に戻ってしまうのですが、私が労働法の立場から「ナイトタイムエコノミー」と聞いて連想してしまうのは長時間労働のようなことで、夜に働いて経済を活性化させる、というイメージなんですね。そうなる

と、やはり違和感があったんです。

ちょっと視点が違うのかもしれませんが、私がイタリアに暮らしている時に大切なこととして学んだのは、自然体で生きていくことです。これがどう労働の話とつながるのかというと、日本では労働とは、先ほどから何度もお話しているように、汗水垂らして苦労をしてこそだと思っている。つまり、労働者である以上、自然な生き方はできない、しかもそれを当たり前だと思い込んでいるのではないか、ということです。本来は、幸福になりたいと思うのも自然なことだし、創造性を発揮できれば嬉しいと思うのも自然なこと、異性を好きになるのも、子どもをもちたいと思うのもとても自然なことであるはずなのに、仕事をする以上は、そういう自然な感情を押し込めて、無理して、頑張らなければならないと思っているのではないか。時間主権という考え方も、労働者が人間として自然に働けるという発想につながります。そうすると、労働時間が短くなって遊ぶ時間も増えるということかもしれませんが、それがナイトタイムということになると、ちょっと違う感じもする。それは暗くなったら眠るという自然な動物の生理に反しているように思えるからです。頑張って経済を活性化させるんだ、ということかもしれませんが、それは人間の自然な生活リズムを犠牲にすることではないかと思うのです。趣旨とは正反対の意見で申し訳ないんですが。

筒井——夫婦共働きということから考えても、とにかく、労働時間を短くするということは、いろんなことにつながっていくんだろうと思います。ナイ

トタイムのサービスを提供する側と提供される側には、またそれぞれに異なる課題があると思いますが、その点に関しては、先ほども話題になった消費者天国であることへの見直しも必要でしょうし、仕事に対して時間主権が得られることも大切だと思います。

大内——時間についての認識が不足していると思わざるを得ないのは、通勤時間の長さを意に介していない人が多いことです。日本は通勤時間が長すぎます。夜遊びしようにも、自宅まで遠ければ限界があります。まあ、その割には、日本人はまだよく頑張っているなとも思いますが、ナイトタイムエコノミーを活性化するためには職住近接がポイントになるのかもしれないですね。あるいは、もっとテレワークを推進すべきだとも思います。ICT (Information and Communication Technology) がこれだけ発達しているのだから、実現するのはさほど難しくないと思うのですが。ただ自宅に引っ込んでしまうと、なかなか夜遊びに出にくくなるということがあるかもしれません。

筒井——確かにテレワークは切り札だと思っていましたが、思ったほど進みませんね。それはまたホワイトカラーエグゼンプションの議論にもつながってくるのかもしれませんが。

大内——何か、この辺りの意識改革、また80年代の幻想を断ち切るくらいのインパクトのある出来事がないと日本人の働き方は変わっていかないのかもしれないですね。そうでなければ、ナイトタイムエコノミーも、期待しているようには発達しないのではないのでしょうか。



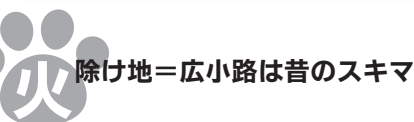
スキマファイル no.12

高層ビルが背丈を競い合っている今日この頃、ふと、足元を見れば、隙間がじわじわと増殖中だ。
都市の空洞化を嘆く御仁には、隙間は負の象徴に見えるのだろうが、断じてそんなことはない。
隙間にこそ、都市の未来が隠れているからだ。「都市には隙間が良く似合う」とは誰の言葉だったか。
この言葉の意味を探るべく、都市にスキマを探しに行く。スキマ探検隊、いざ出陣!!

両国・蔵前スキマ今昔

【今回探検した場所】中央区馬喰町、墨田区両国、台東区蔵前・浅草周辺
【ゲスト】森田弘志さん第一生命財団補佐役 坂本政十賜さんカメラマン

構成:スキマ探検隊 写真:坂本政十賜 イラストマップ:小夜小町



スカイツリー人気で、今、東京の下町がブームです。今回は、そんな下町の隅田川周辺、馬喰町から浅草まで歩きます。さあ、どんなステキなスキマに出会えるか。

スキマ探検隊（以後探検隊と表記）—まずは腹ごしらえ。馬喰町で待ち合わせがてらランチをいただき、出発です。それにしてもこの定食屋「フクモリ」すごくオシャレ。下町ブームはこんなところにも影響が出ているようです。お客さんも女子が多いですね。

森田—カフェ兼定食屋だそうですから（笑）。

探検隊—馬喰町、正しくは日本橋馬喰町で、隣の日本橋横山町と共に問屋街として有名です。袖看板を見ると、アパレル関係の店ばかりですね。

森田—衣類や服飾雑貨の卸が中心です。馬喰という名前の由来ですが、江戸時代にこの辺に馬場があって、馬を売買する馬市もたったそうです。その管理を幕府博労頭が任されて、これが

変じて「馬喰町」となったようです。探検隊—博労頭ってなんですか。

森田—牛馬の売買を行う仲介業者のこと。馬喰町といっても馬を食べていた場所というわけではないようです。

探検隊—前方の浅草橋交差点の横には郡代屋敷跡の案内板がありました、さらに浅草橋を渡り切ったところには、浅草見附の石柱が建っていました。

森田—江戸時代この辺りに関東天領の行政を担当する関東郡代の屋敷があったようです。浅草見附は江戸城の外曲輪門の一つで、この場所に置かれていたことを示しています。ちなみに見附とは、見張り番が置かれた城門のこと

で、江戸城三十六見附と言われている、実際は少し少なかったようです。

探検隊—神田川が隅田川に合流する手前にかかった橋が柳橋。柳橋界限は東



左●柳橋の周囲に停泊する屋形船。夏の花火のシーズンには何十隻もの屋形船が隅田川へ繰り出す

中●両国橋北詰め西側にある三十六見附の一つ浅草見附跡の碑

右●碑の背中側には階段と広場。公園と呼ぶにはちょっと小さく、スキマとしてはやや広いなんとも中途半端な空間だ



京有数の花柳街。今その面影はほとんどありませんが、代わって屋形船が何艘も停泊し、岸辺の堤防にはいくつも船宿が並び、江戸情緒を忍ばせていました。

森田—停泊している船がなんだかスキマのようにも見えてきて、スキママニアにしかわからない愉しみです（苦笑）。

探検隊—隅田川の対岸両国に向かいいますが、靖国通りは、両国橋を渡れば京葉道路と名称が変わります。この両国橋、武蔵（江戸）と上総の二国を結ぶ

スキマ探検隊とは、サッチン、ユーコ、オマチマン、サヨちゃんを中心に編成されたスキマ愛好家グループ



右●一見川に浮かんでいるようにも見える船宿だが、どういう仕組みになっているのだろうか

橋という意味からこう名付けられたそうです。じつは、江戸防衛の見地から、長く隅田川への架橋は認められなかったようですが、明暦の大火を機に防災の必要から橋が架けられたと。しかも、それが縁で橋のたもとに、広いスキマもつくられたというんですから、スキママニアにはたまりませんね。

森田—いわゆる広小路というもので、火災の延焼を防ぐために橋の両側に火除け地＝広小路が設けられたのです。この広小路、今風に言えばまさにスキマと呼んでいいような空間です。この広小路という名のスキマは、その後屋台や芝居小屋が建ち並ぶ繁華街へと発展します。

探検隊—その辺りの事情は、弊誌の企画委員・陣内秀信先生の著書『東京の空間人類学』に詳しく論じられています。この広小路、両国橋を渡った両国側にもありました。しかも、江戸側に比べて、こちらの方がスキマっぽく見えました。



左●かつて回向院は勸進相撲興行の場所だった。力塚は、相撲と回向院のつながりを示す象徴だ
下●回向院の鼠小僧次郎吉の墓。この墓石を削って持っているとお金がたまるらしい。で、商売繁盛ってわけね

森田—こっちの広小路、いろいろいく困縁があるようです。あの赤穂浪士が吉良邸討ち入りの後、すぐそばの回向院で休もうと思ったら断られ、仕方なくここで休息を取ったとか、また、当時の人気観光の一つ「大山詣」には、まずここで身を清めてから向かったようで、そんなことが記された案内板がかかっていました。防火を目的に生まれたスキマですが、次第に用途がはっきりしてくると、スキマではなくなっていく。

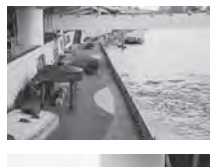
探検隊—スキマのプチ歴史ですね（笑）。

暫定利用のパーキングは現代のスキマ

探検隊—そのあと回向院、国技館を横目で眺めながら隅田川を北上。首都高の下のあまり居心地のよくないスキマ「隅田川緑道公園」を見ながら蔵前橋にたどり着く。そこでじつに不思議なスキマに出会いました。蔵前側の隅田川テラスとNTT東日本の建物の間に長く続くアスファルト舗装の道路のような空間。たぶん道路だとは思いますが、通行を目的としているようには



下●回向院の鼠小僧次郎吉の墓。この墓石を削って持っているとお金



左●隅田川のリバーサイドには、できてしまったスキマがいくつもあった
右●蔵前橋をくぐって隅田川を爆走する宇宙船のような水上バス

見えなくて、そういう意味で立派なスキマです。

森田—その道のような道じゃないような空間と隣り合って、空き地がありましたね。郵便局や警察、道路の反対側には下水道局があって、その立地も変ですが、民家のような戸建てが建っていて、駐車場には警察車両が停めてありました。道端で休んでいる男性に聞くと、警察の施設だというのですが、どう見ても普通の家屋に見えるし……。

探検隊—謎でした。用途のはっきりしない、でもそれなりに広い空間が都市のなかにあるというのは、やっぱり面白い。スキマらしいスキマでした（じつは、翌日ゼンリンの『住宅地図』で確かめたら、やっぱり所有者のある住宅でした）。

森田—蔵前橋から、蔵前通りを歩き鳥越神社へ。その途中「蓬莱園」の大イチョウを鑑賞しました。

探検隊—東京都の天然記念物に指定されているとのことで、その名に恥じな



下●回向院の鼠小僧次郎吉の墓。この墓石を削って持っているとお金





上●かつてはこうした長屋が建ち並んでいたのだったが、今はビルに建て替えられたものも多い
右●これぞ銭湯建築! といわんばかりの千鳥破風がみごとなお風呂屋さん



丁に出ました。夕暮れ近くで稼ぎ時だと思ったのですが、人通りはまばら。探検隊—もともとの辺りは工場労働者が多く、野菜や生魚より惣菜などが好まれたらしく、いつしかおかず横丁と呼ばれるようになったようです。森田—ただ、この周辺も時代の荒波が襲っているようで、覗いた佃煮屋さんの隣の家屋はまさに取り壊しの真っ最中でした。我々はその後浅草まで歩いたのですが、今回もなかなか有意義なスキマ探検になりました。探検隊—江戸時代のスキマ、広小路に始まり、更地になって放置された現代のスキマ。同じスキマではあるけれど、その成り立ちや行く末はさまざまです。森田—今回見たようなつくられたスキマあるいは放置されたスキマ。今後人口減少が進むとますます増えていくように思います。スキマを巡る課題でしょうか。探検隊—いろんな宿題をもらったスキマ探検になりました。

スキマが語る都市の課題

森田—現役組の長屋を眺めながら歩いていくと、銭湯がありました。長屋風の家には、風呂なしもあるので。お風呂屋さんではなくてはならない存在です。しばらくまた行くと、おかず横



左●キッチン用品なら何でも揃う「かつば橋道具街」のシンボリック存在ニイミ洋食器店の巨大コックさん
右●スカイツリーは今や下町のシンボル



●櫛の歯が欠けるように、町並みのところどころに出現した駐車スペース

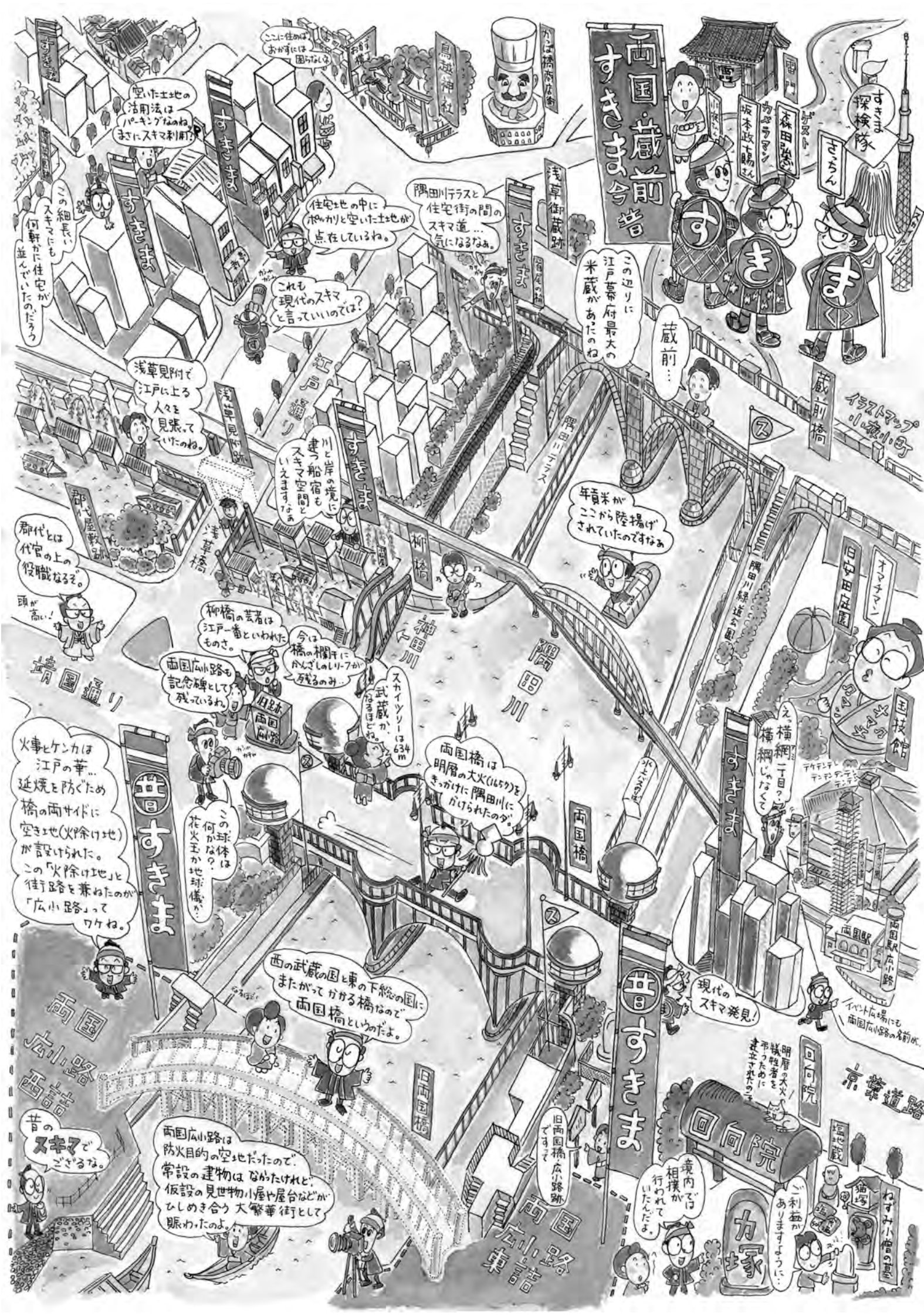


い堂々とした大木でした。「蓬莱園」は、江戸後期築造の名園だそうです、なんと、今は都立忍岡高校の敷地内にあるため、外から眺める他なくて、ちょっと残念でした。森田—この辺り(浅草橋)を少し歩き回りましたが、長屋風の建物が多かったですね。いわゆる木造密集地域で、かなり老朽化した建物もありましたが、それでも生活の匂いが漂っていて、いい雰囲気でした。

探検隊—坂本カメラマンは、こうした古い木造の建物が好きらしく、この日も目を輝かせてパチパチ撮ってました。森田—ただ、軒を連ねた建物の間にちょうど一軒分の更地がいくつもありました。通りを挟んで木造の建物が並んで建っているんですが、あたかもの櫛の歯が欠けるように、ぽつりぽつりと空き地ができています。そして大概そこは駐車場になっている。その隣は新築の戸建てだったり、築50年は経っていると思われる古い建物の場合



左●江戸後期築造の名園「蓬莱園」の大イチョウ。現在は都立忍岡高校の敷地内にある
右上●児童公園・小島公園では、1年365日ラジオ体操が行われている。きつと朝は元気なお年寄りていっぱいはず
右下●若い女性が始めた駄菓子屋は、子どもたちに大人気



子どもたちの「笑顔」に会いに行く

一般財団法人 第一生命財団が「より多くの子どもたちに安全・安心な保育環境と、健やかな心とからだを育み、また豊かな創造力を養う機会が提供されること」を目的に創設した「待機児童対策・保育所等助成事業」。

助成へ応募する動機には、園庭の遊具を充実させたいという意向も多い。保育所等で長い時間を過ごす子どもたちにとって、園庭での遊びがいかに大切なものなのか、今回は園庭の設備を充実させた、福島県福島市と埼玉県ふじみ野市の保育園を訪ねた。

取材・文・photo: 斎藤夕子

福島県福島市 すばる保育園 大空のもと、園庭でのびのび元気に遊ぼう！

社会医療法人福島厚生会が運営する福島第一病院は、救急にも24時間対応する、地域に密着した総合病院だ。同法人が運営する「すばる保育園」は、病院従業員の子どもたちを預かる事業所内保育所として運営されてきた。東日本大震災後の2013年に病院敷地内の一角に移転し、屋内運動場「プレイコート」をもつ園舎を新設。その後、2015年7月1日に事業所内保育事業の認可を受け、従業員枠38名、地域

枠12名を定員とする保育園として、新たなスタートを切った。「今までは、子どもたちの遊び場は屋内のプレイコートが中心でした。砂場もプレイコートのなかにつくって遊んでいたんです。震災から5年、ようやく市内の除染も進み、園庭の放射線量もずいぶん下がってきたので外遊びの時間を充実させたいと考え始めました。ですが園庭には、遊具がほとんどありませんでした。そんな時に助成の



●大内すみ子園長

話を聞き、その助けを借りて、ぜひ園庭を整備したいと思って応募させていただいたんです」

大内すみ子園長は、笑顔でそう教えてくれる。

ダイナミックな遊びを取り戻す

園庭に出てみると、たくさんの子どもたちが思い思いに遊んでいた。園庭の端から端までをお友だちと走り回ったり、三輪車に乗ったり。砂場では、バケツに砂を詰めて、何やら真剣につくっている。園庭の真ん中に設置されたトンネル付きの築山はことのほか人



●大空のもと、外遊びをのびのびと楽しむ子どもたち



●登ったり、くぐったり。築山とトンネルは大人気の遊び場。テッペンに立つ子どもたちの姿はまるで冒険家

気があるようで、男の子たちはそのテッペンで、冒険家よろしく、誇らしげに眼下を見下ろしている。その下のトンネルをくぐり抜けてくる子を上から覗き込んで、お互いにふざけあったりする姿もあった。また、赤い扉がオシャレな小さなハウスの中では、何人かの子どもたちが集まって、おままごとが進んでいるようだ。

園庭の築山、砂場、ハウスが、今回の助成によって整備されたものだ。ちなみにプレイコート内の砂場はすでに廃止されていた。

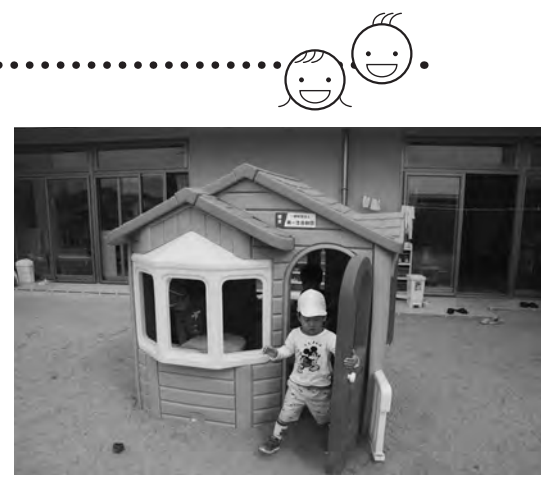
「今年の3月に園庭が整備されるまで、外遊びもしてはいましたがお散歩が中心でした。そのお散歩に行っても、小さい子たちはすぐに歩き疲れてしまって、子どもたちの体力低下をととても心配していたんです。それが、園庭が完成してからこれまでに、子どもたちに体力がついてきたことを本当に実感しています。子どもたちは、今ではまさにエネルギーの固まり。ずっと走り



●クリエイティブな創造力やお友だちとの協調性を育む砂場遊び。子どもたちはプレイコート内にあった砂場よりも大胆に、創造力を発揮しているようだ

回って遊んでいます。お砂場遊びもプレイコート内での遊び方とはまったく違い、とてもダイナミックになりました。砂場の砂は、ハウスに運んできておままごとにも使うため、すぐに少なくなってしまうのですが、それも遊びの幅が広がっていることの証ですね」

苦笑しながらも大内園長は嬉しそうにそう言う。なかでも築山は、とくに子どもたちの体力や身体能力の向上に貢献しているようだ。年長の子どもたちはいろんな方法で、全身を使って築山を上り下りすることができるが、2歳児でもロープを上手に掴んで、足の指でしっかり地面を捉えて上まで登り、お尻で滑り下りてくるのだという。築山の中に設置された土管のトンネルも結構長い。1、2歳の子どもたちでも怖がらずに四つん這いになって、あるいはしゃがんだ格好のまま、スルスルとくぐり抜けてくるという。「子どもたちは築山が大好きで、テッペンまで登ると、とても達成感がある



●ハウスは、おままごとの場になったり、秘密基地になったりと大活躍

ようです。そんな達成感子どもたちの自信になり、何事にも積極的になってきていると思います」と大内園長。また、大きい子が小さい子に遊び方を教えてあげたり、独自に遊びのルールをつくったりと、遊びのなかで社会性が身についてきていることも感じているのだという。

子どもの姿に感じる町の未来

事業所内保育所として、定員の内従業員枠2／3、地域枠1／3という枠組みを設けているすばる保育園だが、最近では地域からの入園希望者が多く、現在は、地域枠定員を少し上回る形で受け入れているという。東日本大震災以降、福島県全体の人口では11万人強が減少したそうだが、この辺りでは少しずつ、子どもをもつ世帯数が増えてきているようだ。それだけに「園舎も何かと手狭になってきました」と

大内園長。園庭での遊びが充実してきた今、園舎の屋内・屋外空間をより活用できる方法を模索しているそうだ。

子どもたちの健やかな成長を願い、今年やっと、大空のもと、園庭での遊びを取り戻したすばる保育園。元気に

遊ぶ子どもたちの姿は、地域の人々にとっても、未来へとつながる希望となっているはずだ。

埼玉県ふじみ野市 亀久保ひまわり保育園 園庭は限りない可能性を秘めた「フィールド」

2015年4月、定員120名の大規模保育園として開園した「亀久保ひまわり保育園」。その園舎の裏手、物流倉庫脇に設けられた細い私道を抜けていくと、伸びやかな広場が現れた。およそ600㎡もの広さをもつ、亀久保ひまわり保育園の園庭だ。その一角に設置された6本足の登り棒と3段階の高さのある鉄棒、そして足こぎ自転車8台が、今回「待機児童対策・保育所等助成事業」の助成によって導入された新しい遊具だ。

小林倫子園長が「みんな、登り棒に上手に登れるか見せて!」と声をかけると、「いいよ!」と元気な声が応える。集まった6人の子どもたちは慣れたもので、靴下を脱いで裸足になり、全身

を使ってスルスと、上まで登って見せてくれた。最初に登りきった女の子は、棒のテッペンで、誇らしげな笑顔。遅れて登ってきた男の子も「ほら、僕だってできるよ!」と園長先生にアピールをしている。じつは繰り返し練習してようやく上まで登れるようになり、その姿を、早く園長先生に見てもらいたかったらしい。

隣の鉄棒では、女の子たちが逆上がりの練習中だ。保育士の先生に励まされながら、一生懸命、地面を蹴り上げている。一方、足こぎ自転車に乗りたい子どもたちは、備品倉庫の前で出してもらおうのを待ち構えていた。離れて様子を見てみると、颯爽と自転車に跨った子どもたちが、猛スピードでこち



●小林倫子園長

らに向かってくる。他にも、お友だちと走り回って鬼ごっこを始める子、縄跳びをする子など、広い園庭のなかで、たくさんの子どもたちがのびのびと遊びまわっている。

「大勢の子どもたちが一緒に遊べるので、年長の子どもが小さい子どもに遊び方を教えてあげたり、遊びをサポートしてあげるような姿がごく自然に見られます。園庭での遊びを通じて、子ども同士で教えあい、成長しあってい



●園舎と園庭をつなぐ細い路地。秘密の通路のようなワクワク感も



●大勢で一緒に遊べる広大な園庭



●6人がいっせいに使える登り棒。足の裏も使い、上手に登っていく



るんです」

子どもたちの遊ぶ姿を笑顔で見守りながら、小林園長はそう教えてくれる。

園庭整備で「完璧な保育園」に

じつはこの園庭、2015年の開園当時には整備されておらず、もともとは園舎の外側に設けられた小さな園庭に砂場があっただけだった。しかしそのことが一部の保護者から問題視されることになる。そこには固有の背景があった。開園準備中、近隣の公立保育園2園が耐震問題で廃園になってしまったため、新設される亀久保ひまわり保育園が急速、その受け入れ先になった。このことから、もともと公立保育園に通っていた保護者は困惑すると共に地域住民からも不安視されることに。そんななか何度も開催してきた説明会で、何より「園庭がない」ということが大きな問題になってしまったのだ。



●前転から逆上がり、足掛け回りなど、次々と難しい技に挑戦



左上●足こぎ自転車にまたがって競争する仲良し3人組

左下●園舎の外側にある園庭には、小さい子どもたちが遊ぶのに最適な砂場が設けられている

右●木の温もりを生かした園舎

「開園後は園庭が小さくても毎日のようにお散歩に出かけたり、室内でも子どもたちが十分からだを動かして遊べる工夫をたくさん取り入れ、そのことは随時、ホームページやお便りで保護者の方々にお伝えしてきました。また当園にはバスもありますので、それぞれのクラスが毎月1回は〈バス散歩〉として、大きな公園に出かけています。これらのことがだんだんと理解されるようになり、開園年度の2月に行ったアンケート調査では私たちも驚くほど、保護者の方々から高い支持率をいただくことができました。地域の方から園庭用に土地を貸してもらえることになったのも、私たちの日々の活動を理解してくださったからだと思います」

小林園長は笑顔でそう言って「園庭がないことは唯一の弱みでしたが、それも解決されパワーアップできました」と自信をのぞかせる。

地域からも信頼される保育園として

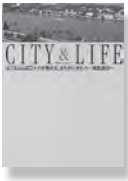
ところが広大な園庭を確保することができたものの、遊具を揃えるだけの予算がなかった。「そんな時、遊具のご相談をした事業者さんから今回の助成の話を聞きました。すぐに応募して、

職員みんなで祈るような気持ちで結果を待っていたんです。ですから決まった時には、みんなで飛び上がって喜びました」と小林園長。助成で導入した遊具に加え、運営する社会福祉法人えんがわ福祉会理事長の自費でジャングルジムが寄付され、2016年末に園庭の整備が完了。2017年1月には「遊び初め式」を行い、子どもたちへお披露目された。

「園庭が完成してそろそろ1年。目の行き届くエリアのなかで毎日安全に遊ぶことが、いかに子どもたちのからだを心で成長させるかを日々実感しています。また、充実した設備が整っているということは、保護者だけでなく、地域の方々からの保育園への信頼にもつながるとも感じています」とも小林園長は言う。子どもたちがのびのびと安心して過ごすためには、地域から信頼される保育園であることはとても大切なことだろう。

その意味で、広い園庭を確保したプロセスは、保育園にとって、とても大きな出来事だったはずだ。そして、その園庭で元気に遊ぶ子どもたちの笑顔の明るさは、地域を活気づけるエネルギーにもなっているに違いない。

No.1	特集「都市の幹線道路」	(1984.2)	在庫切れ
No.2	特集「都市公園」	(1984.5)	在庫切れ
No.3	特集「都市と河川」	(1984.12)	
No.4	特集「子どものための都市計画」	(1985.6)	在庫切れ
No.5	特集「都市と盛り場」	(1985.12)	
No.6	特集「都市生活と神社仏閣」	(1986.5)	
No.7	特集「住宅地の道路と家並み」	(1986.9)	
No.8	特集「都市とヒュームスケール」	(1987.3)	
No.9	特集「都市と水辺」	(1987.7)	在庫切れ
No.10	特集「都市の景観」	(1987.12)	在庫切れ
No.11	特集「都市と防火」	(1988.7)	在庫切れ
No.12	特集「都市とアメニティ」	(1988.12)	在庫切れ
No.13	特集「都市と運河」	(1989.8)	
No.14	特集「都市再開発とアーバンデザイン」	(1989.12)	
No.15	特集「アミューズメントと都市」	(1990.3)	
	●21世紀都市の予感 泉真也 ●ルポルタージュ 東京ディズニーランド 富沢木実 ●死が内部化した場所―世界の終りの遊園地 大澤真幸 ●博覧会と遊園地 吉見俊哉 ●マネージメントの王国 彦坂裕 ●鼎談 今日のユートピアの中で変わりゆく遊びの構造 柏木博＋仙田満＋山岸健 ●連載 戦後日本の住宅づくり・1 本城和彦		
No.16	特集「高齢化社会と都市」	(1990.6)	在庫切れ
No.17	特集「私鉄と歩んだ都市」	(1990.9)	
No.18	特集「都市とホール」	(1990.12)	
No.19	特集「エコロジー都市」	(1991.3)	
No.20	特集「新・集合住宅論」	(1991.6)	
No.21	特集「新・リゾート論」	(1991.9)	
No.22	特集「都市と商業空間」	(1991.12)	
No.23	特集「都市の民俗誌」	(1992.3)	
No.24	特集「都市と緑化」	(1992.6)	
No.25	特集「公共建築のデザイン」	(1992.9)	
No.26	特集「都市と高層ビル」	(1992.12)	
No.27	特集「住宅の間取り」	(1993.3)	
No.28	特集「都市と広告」	(1993.6)	
No.29	特集「都市の上水道」	(1993.9)	
No.30	特集「都市の保存」	(1993.12)	

No.31	特集「ミュージアムと都市」	(1994.3)	
No.32	特集「プレハブ住宅」	(1994.6)	
No.33	特集「都市の色彩」	(1994.9)	
No.34	特集「観光都市の条件」	(1994.12)	
No.35	特集「都市と下水道」	(1995.3)	
No.36	特集「マンションのメンテナンス」	(1995.6)	
No.37	特集「都市と歩道空間」	(1995.9)	
No.38	特集「ゴミとリサイクル」	(1995.12)	
No.39	特集「住宅の水まわり」	(1996.3)	
No.40	特集「都市の駐車空間」	(1996.6)	
No.41	特集「橋のデザイン」	(1996.9)	
No.42	特集「建築と木材」	(1996.12)	
No.43	特集「輸入住宅」	(1997.3)	
No.44	特集「都市と学校」	(1997.6)	
No.45	特集「環境共生型まちづくり」	(1997.9)	
No.46	特集「都市と情報化」	(1997.12)	
No.47	特集「老いない住宅」	(1998.3)	
No.48	特集「都市と駅舎」	(1998.6)	
No.49	特集「住宅のコスト」	(1998.9)	
No.50	特集「路面電車ルネサンス」	(1998.12)	
No.51	特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう―集客都市へ」	(1999.3)	
	●まちづくり三法と中心市街地の活性化 日端康雄 ●集客都市へ―商業施設は都市再生の起爆剤になりうるか ●ケーススタディ 商店街新世紀 ●ケーススタディ 次世代型複合施設 ●ケーススタディ 大阪・あそびからのまちづくり ●都市再生。タウン・マネージメントの視点から考える ●商業機能の進化―アメリカの小売業の試み 舟本秀男 ●連載 都市を拓いた人々・29 徳島		
No.52	特集「シルバー・ハウジング」	(1999.6)	
No.53	特集「NPOとまちづくり」	(1999.9)	
No.54	特集「地域のノード、公共施設の新潮流」	(1999.12)	
No.55	特集「都市公園の未来」	(2000.3)	
No.56	特集「まちづくりの新しいパラダイム」	(2000.6)	
No.57	特集「島のまちづくりに学ぶ 沖縄編」	(2000.9)	
No.58	特集「地域に開く大学」	(2000.12)	
No.59	特集「危機管理のまちづくり」	(2001.3)	
No.60	特集「保存―都市と建築、過去と未来をつなぐもの」	(2001.6)	
No.61	特集「30代建築家の都市イメージ」	(2001.9)	
No.62	特集「使う建築、使うまち―都市のストック活用法 国内編」	(2001.12)	
No.63	特集「LETS的まちづくり」	(2002.3)	
No.64	特集「『都心居住』のまちづくり」	(2002.6)	
No.65	特集「都市はアートで刺激される」	(2002.9)	
No.66	特集「ランドスケープ・デザインの新展開―地形を活かしたまちづくり」	(2002.12)	
No.67	特集「スローライフとまちづくり」	(2003.3)	
No.68	特集「サステナブルな都市“成長”政策―都市計画と長期ビジョン」	(2003.6)	

No.69	特集「吉祥寺―住みたい町ナンバー1の理由」	(2003.9)	
No.70	特集「緑の建物づくり」	(2003.12)	
No.71	特集「都市と観光、新たな視点」	(2004.3)	
	●ルポ 果たして都市は観光資源となりうるのか―まちづくりと観光 ●ケーススタディ まちづくりは観光地づくりか 昭和30年代の「どこにでもある町」が観光客で大賑わい?!―大分県豊後高田市／そのままの“砂浜”や“ラッキョウ畑”が観光資源に?!―高知県幡多郡大方町／「運河論争」以降に華開いた「観光地・小樽」に「地域」とつながる新たな兆し―北海道小樽市 ●ご近所ツアー 「谷中」町歩きの愉しみ ●鼎談 谷中の「観光」について、ひとつじっくり考えてみようか 日端康雄＋片山和俊＋椎原晶子 ●ルポ 東京に「アミューズメント温泉」が増殖している理由 ●データベース消費時代の「観光」を考える。 秋山綾 ●エッセイ 旅のあたらしい足音―群島で学び逸れながら 今福龍太		
No.72	特集「構造改革特区とまちづくり」	(2004.6)	
No.73	特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」	(2004.9)	
No.74	特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市[論]の現在」	(2004.12)	
No.75	特集「マルチモダルが都市を楽しくする[ヨーロッパ編]」	(2005.3)	
No.76	特集「路地・横丁空間からの都市再生」	(2005.6)	
	●対談 路地はなぜ必要か 安原秀＋橋爪紳也 ●サーベイ 復活! 法善寺横丁―蘇った路地空間 ●路地・横丁Report [大阪編] ●路地・横丁Report [京都編] ●ルポ 路地はコミュニティ―「向こう三軒両隣」のまちづくり ●ルポ 「路地っぽさ」を演出する―路地の時代の商業施設 ●インタビュー 路地から見る都市の未来 青木仁 ●綴じ込みMap 路地・横丁Report [東京23区編]		
No.77	特集「公共空間、新たな視点」	(2005.9)	
No.78	特集「小さな町の豊かな暮らし」	(2005.12)	
No.79	特集「都市の「良質な」居住環境」	(2006.3)	
No.80	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ①」	(2006.6)	
No.81	特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」	(2006.9)	
No.82	特集「エリア・スタディ・シリーズ 「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」	(2006.12)	
No.83	特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」	(2007.3)	重版
No.84	特集「サイクリング・シティの可能性」	(2007.6)	
No.85	特集「地図とまち―見る・歩く・つくる」	(2007.9)	
No.86	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ②」	(2007.12)	
No.87	特集「「美味し国」の景観論―フランス、都市景観の新たな創造」	(2008.3)	
No.88	特集「美味しいまちづくり」	(2008.6)	
No.89	特集「都市を愉しむいくつかの方法」	(2008.9)	
No.90	特集「シュリンキング・シティ―縮小する都市の新たなイメージ」	(2008.12)	
No.91	特集「都市彩譜―まちのいろどりのふ」	(2009.3)	
No.92	特集「fun town―たのしい・かわいい・やさしいまちづくり」	(2009.6)	
No.93	特集「マチとムラの幸福のレシピ」	(2009.9)	
No.94	特集「創造のまちづくり」	(2009.12)	
No.95	特集「団地ルネッサンス」	(2010.3)	
No.96	特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」	(2010.6)	

No.97	特集「新しい公共交通～生活支援ネットワークへ～」	(2010.9)	
No.98	特集「下北沢から「都市」を考える」	(2010.12)	在庫切れ
No.99	特集「「学校」からのまちづくり」	(2011.3)	
No.100	特集「21世紀のまちづくり 「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」	(2011.6)	
No.101	特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい―再生・復興への視点」	(2011.9)	
No.102	特集「交流住宅―新しい暮らしのかたち」	(2011.12)	
No.103	特集「時間に暮らす」	(2012.3)	
No.104	特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」	(2012.6)	
No.105	特集「「町おこし」新潮流― 地域に埋もれたコンテンツを発信する」	(2012.9)	
No.106	特集「子どもの空間とまちづくり」	(2012.12)	在庫切れ
No.107	特集「シティホール―市庁舎の新潮流」	(2013.3)	
No.108	特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」	(2013.7)	
No.109	特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」	(2013.11)	
No.110	特集「都市とサイン」	(2014.3)	
No.111	特集「自由が丘―暮らしやすさの秘密を探る」	(2014.7)	
No.112	特集「新しいパートナーシップ―PPP>PFI> コンセッション方式」	(2014.11)	
No.113	特集「新しい図書館」	(2015.3)	
No.114	特集「空き家―家と暮らしと地域のこれから」	(2015.7)	
No.115	特集「酒とまちづくり」	(2015.11)	
	●エリアスタディ 酒と地域のライフデザイン 山梨・甲州―ワインにまつわる遺産や風景を楽しみ、歩き、飲むのが勝沼流／京都・伏見―京都で生まれ育った酒米を、京都の水と技術で醸す／東京・阿佐ヶ谷―地域の「飲み屋文化」を活かした「阿佐ヶ谷飲み屋さん祭り」 ●ルポ・1 地ビールづくりはまちづくり ●ルポ・2 京都発、全国に広がる「乾杯条例」 ●エッセイ 酒好きと酒と酒蔵と「町」または「ふるさと」 遠藤哲夫 ●スキマファイル・6 ドンツキラピリンス向島・京島を行く ●子どもたちの「笑顔」に会いに行く・6 城山保育園上石原／天王寺駅前おおぞら保育園		
No.116	特集「ロスト近代と都市の未来」	(2016.3)	
No.117	特集「建築とまちづくり」	(2016.7)	
No.118	特集「空き地カルチャー 多孔質都市の可能性」	(2016.11)	
No.119	特集「〈ゲストハウス〉的まちづくり」	(2017.3)	
	●ルポ 「ゲストハウス」は町に効く ●ケーススタディ 地域とつながる「ゲストハウス」 Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE / YOKOHAMA HOSTEL VILLAGE / 亀時間 / guest house MARUYA ●ルポ 連携する地域と宿―アルベルゴ・ディッファーズの可能性 ●連載 スキマファイル・10 蒲田・鶴見、昭和の秘境駅。 ●連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・10 認定みどりこども園／湘南まるめろ保育園		
No.120	特集「ライフスタイルとしての〈防災〉」	(2017.8)	
●連続インタビュー 防災・減災まちづくりを考える 1.基本的な情報を知り、災害を自分の問題として捉える 河野恵昭／2.被災する前に復興を考える、「復興準備」という防災 加藤孝明／3.住民同士の関係性が、避難行動にどう影響を与えるかが鍵 松本行真 ●ケーススタディ 防災コミュニティ助け合いのまちづくり 1.浸水から親水へ。水と緑に囲まれた新小岩を東京一番の町にする―新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会／2.昼夜間の人口差を乗り越え、住民と事業所が助け合って町を守る―日本橋三丁目西町会／3.日常生活のなかで、肩ひじ張らずに取り組む「防災」―伊座利の未来を考える推進協議会 ●ルポ 楽しい「防災」―遊びを通じて意識を変える ●連載 スキマファイル・11 屋根のあるスキマ&どんぐりひろば ●連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・11 港南あひる保育園／中央ながかみ保育園			

待機児童対策・保育所等助成事業 第5回（2017年度）助成施設のお知らせ

この度、第5回の助成施設を決定しましたので、お知らせします。待機児童数が多い地域において、開園して間もない保育園および認定こども園から、236件の応募をいただきました。厳正なる選考の結果、下表のとおり44件、助成総額2998万円（申請額）の助成を決定しました。

地域		施設名称	購入希望品（抜粋）
都道府県	市区町村		
北海道	札幌市	もりのなかま保育園札幌山鼻園	人工芝、砂場、鳥の餌箱、ブドウ苗木
	宮城県 (4)	富沢自由の星保育園	鉄琴、木琴、太鼓、ドラム、シンバル、カスタネット他
		わくわくモリモリ保育園	ぱっと組替えジム、マット、カート、バランスパー
	石巻市	ハピネス保育園	おいかけてコロコロボール、バイキングJバケツ他
	多賀城市	きらり保育園多賀城	ハイハイのみち、つかまり立ちサークル、のぼりおりの階段
福島県	福島市	福島郷野目こども園	平均台、ハードル、バルーン、玉入れ他
茨城県	つくば市	ラ・フェリーチェ保育園	電子ピアノ
栃木県	宇都宮市	みらいの森保育園	砂場、大型複合遊具
埼玉県 (5)	さいたま市	大成たいよう保育園	フープ、なわとびポール、サッカーゴール、巧技台他
		きらり遊愛保育園	ミニハウス、ベンチ、紙芝居、絵本、縫いさしセット他
		ふらっと保育園	巧技台
		ルピナス保育園	人形、平均台、バランスストーン、絵本他
	川口市	みらい保育園	フープ、バルーン、リバーストーン他
東京都 (5)	世田谷区	第二いちご保育園	くぬぎの木、ロープ
	杉並区	よくふう保育園	ベンチ
	北区	たばた絆保育園	紙芝居、絵本、パズル、楽器
	葛飾区	ほっぺるランド西新小岩	ユニット砂場、ワゴン、トロッコ、シャベル、ジョウロ他
	武蔵野市	チャイルドホーム武蔵境	ぱっと組み換えジム、椅子
神奈川県 (4)	横浜市	下田みんなの保育園	ピアノ、鈴、カスタネット、ピアノ他
		尚花ぞうさん保育室	トンネルジム、収納すべり台、パーテーション
		とこちゃん☆みつつ保育園	庭木、プランター、園芸用土、砂場セット他
	相模原市	認定こども園相模林間幼稚園	すべり台
静岡県	浜松市	しんえい保育園	デジタルスケール、身長計、お散歩車、ベビープール他
愛知県	名古屋市	まつかぜ保育園	ジャングルジム、すべり台、巧技台、マット他
滋賀県	東近江市	そらの鳥こども園	雲梯、ブランコ
大阪府 (5)	大阪市	てんとうむし園	ミュージックベル、ドラム、木琴、鉄琴、ウッドブロック他
		キッズベアー文の里	巧技台、マット、平均台
		どろんこ保育園分園れんげ園	本棚、整理棚、整理BOX、ブックスタンド、マット
		はらっぱ舎	砂場
	池田市	子どものお家ぞうさん保育園	ベビーマットレス、ロングライトバスG
兵庫県 (3)	神戸市	認定こども園頌栄保育園	竹材費、レンギョウ、イチジク他
		ろっこうARIMA保育園	丸太越え、階段、玉入れ、平均台他
	西宮市	幼保連携型認定こども園西宮つとがわYMCA保育園	築山、植樹、クライミングネット
岡山県	倉敷市	あすなろ園事業所内保育施設はちまん乳児保育園	シンセサイザー、ピアノ、ドラム、マット他
広島県 (2)	広島市	サンヒルズ保育園	絵本、絵本棚、ソファー
	福山市	御幸保育所	空気清浄機、ヒーター、ベッド、オマル、おむつ交換台他
愛媛県	松山市	保育所型事業所内保育所きらきらキッズ	パーテーション
福岡県 (2)	福岡市	学研都市まぶね保育園	アスレチック
	朝倉郡	あさひ保育園	雲梯、ネットトンネル、こ山
熊本県 (4)	熊本市	白坪・ひまわり保育園	ままごと、パズル、マット、プレイジム
		とろく保育舎びーかーぶー	午睡用ベッド
		幼保連携型認定こども園聖母幼稚園	テーブル、絵本棚、壁面フック、お散歩車他
	合志市	百合ヶ丘保育園	鉄棒、平均台、雲梯、跳び箱、マット
鹿児島県	始良市	幼保連携型認定こども園ひまわりこども園	テーブル、ベンチ、平均台、築山他

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、平成25年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「緑の環境プラン大賞」に取り組んでいます。

●ホームページ <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/>

購読のご案内

年3回（8月・12月・4月）発行、頒価500円＋送料

定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容（PDF）をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください、ご希望の号をお求め願います。

city©life no.121 Dec.-Mar. 2017-2018

2017年12月発行

企画委員	日端康雄（慶應義塾大学名誉教授）
	陣内秀信（法政大学教授）
	大村謙二郎（筑波大学名誉教授）
	小泉秀樹（東京大学教授）
編集・発行	木下庸子（工学院大学教授）
	小野文夫（当財団常務理事）
	佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）
	一般財団法人 第一生命財団 東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階 電話03-3239-2312
編集協力	株式会社アルシーヴ社
	斎藤タ子
デザイン・レイアウト	生沼伸子
印刷	株式会社恒陽社印刷所
	頒価500円・送料215円

